

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	北陸財務局長
【提出日】	2019年5月30日
【事業年度】	第103期（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）
【会社名】	株式会社大和
【英訳名】	Daiwa Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 宮 二郎
【本店の所在の場所】	石川県金沢市片町二丁目2番5号
【電話番号】	(076)220-1100
【事務連絡者氏名】	業務本部総務部長 長嶋 和生
【最寄りの連絡場所】	石川県金沢市片町二丁目2番5号
【電話番号】	(076)220-1100
【事務連絡者氏名】	業務本部総務部長 長嶋 和生
【縦覧に供する場所】	株式会社大和富山店 (富山県富山市総曲輪三丁目8番6号) 株式会社大和東京駐在所 (東京都江東区木場二丁目18番11号 大丸コアビル6階) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第99期	第100期	第101期	第102期	第103期
決算年月	2015年2月	2016年2月	2017年2月	2018年2月	2019年2月
売上高 (千円)	49,340,242	48,143,420	46,359,657	45,509,332	45,627,622
経常利益 (千円)	720,648	607,474	262,295	127,767	307,238
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 (千円)	1,075,823	1,108,906	266,881	89,038	4,752,406
包括利益 (千円)	1,541,952	376,255	471,988	286,088	5,057,359
純資産額 (千円)	7,709,578	7,882,587	8,266,645	8,467,481	3,325,528
総資産額 (千円)	41,792,054	37,056,087	35,356,333	33,999,443	28,227,199
1株当たり純資産額 (円)	274.51	279.76	1,460.68	1,490.05	571.92
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 (円)	38.30	39.49	47.53	15.86	846.79
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	18.4	21.2	23.2	24.6	11.4
自己資本利益率 (%)	15.69	14.25	3.32	1.08	82.13
株価収益率 (倍)	7.44	4.08	12.62	38.77	0.65
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	1,422,280	1,448,248	1,388,147	1,321,051	888,056
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	504,576	1,432,983	343,513	720,826	155,051
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	705,985	4,044,637	2,028,825	1,629,656	926,886
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	3,590,988	2,427,582	1,443,390	1,855,612	1,661,731
従業員数 (人)	791	752	728	722	714
(外、平均臨時雇用者数)	(8)	(7)	(7)	(9)	(12)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

3. 当社は2017年9月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っており、第101期の期首に当該株式併合が行われたものと仮定して、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定している。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第99期	第100期	第101期	第102期	第103期
決算年月	2015年2月	2016年2月	2017年2月	2018年2月	2019年2月
売上高 (千円)	46,742,902	45,509,750	43,881,089	43,016,613	43,146,992
経常利益 (千円)	650,686	477,164	116,230	72,575	234,335
当期純利益又は当期純損失 () (千円)	1,054,159	1,019,456	182,008	51,325	4,784,655
資本金 (千円)	3,462,700	3,462,700	3,462,700	3,462,700	3,462,700
発行済株式総数 (千株)	30,017	30,017	30,017	6,003	6,003
純資産額 (千円)	5,899,126	6,021,290	6,327,711	6,422,770	1,244,592
総資産額 (千円)	37,848,952	33,108,837	31,372,218	30,102,750	24,277,538
1株当たり純資産額 (円)	210.05	214.47	1,127.03	1,144.31	221.78
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額) (円)	3.00 (-)	3.00 (-)	3.00 (-)	15.00 (-)	- (-)
1株当たり当期純利益又は1株 当たり当期純損失() (円)	37.53	36.31	32.42	9.14	852.54
潜在株式調整後1株当たり当期 純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	15.6	18.2	20.2	21.3	5.1
自己資本利益率 (%)	20.51	17.10	2.97	0.81	124.81
株価収益率 (倍)	7.59	4.43	18.52	67.26	0.65
配当性向 (%)	8.00	8.26	46.30	164.11	-
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	572 (-)	533 (-)	513 (-)	511 (-)	488 (-)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。

3. 当社は2017年9月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っており、第101期の期首に当該株式併合が行われたものと仮定して、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益を算定している。

2【沿革】

年月	沿革
1923年10月	店祖井村徳三郎氏が百貨店事業として京都大丸と提携、石川県金沢市片町に、宮市百貨店を創設。
1930年 8月	株式会社宮市大丸（資本金150千円）を、金沢市片町に設立。
1932年11月	富山県富山市に富山店を開設。
1937年 9月	福井県福井市に福井店を開設。
1939年 9月	大阪府大阪市に大阪出張所を設置。
1940年12月	清津店を開設。
1942年11月	石川県金沢市に石川日産自動車販売(株)を設立。
1943年12月	丸越と合併、株式会社大和（金沢、武蔵、新潟、富山、福井、高岡、清津、計7店舗 資本金3,100千円）を金沢市片町に設立。
1945年 9月	終戦により清津店が消滅。
1948年 4月	東京都中央区に東京出張所を設置。
1948年 6月	福井地震により福井店を閉鎖。
1949年 7月	新潟証券取引所に上場。
1952年 7月	武蔵店を閉鎖。
1954年10月	石川県金沢市に(株)大和印刷社（現・連結子会社）を設立。
1958年10月	新潟県長岡市に長岡店を開設。
1961年10月	大阪証券取引所市場第二部に上場。
1967年12月	石川県野々市町に(株)大和ハウジングを設立。
1970年 3月	東京都中央区に(株)勁草書房（現・連結子会社）を設立。
1970年 9月	石川県金沢市に(株)金沢ニューグランドホテル（現・連結子会社）を設立。
1973年 3月	石川県金沢市に(株)大和カーネーションサークル（現・連結子会社）を設立。
1975年 7月	新潟県上越市に上越店を開設。
1975年12月	石川県金沢市に(株)レストランダイワ（現・連結子会社）を設立。
1985年 9月	石川県金沢市に(株)大和服飾研究所を設立。
1985年 9月	石川県金沢市に(株)ディー・アンド・シー（現・連結子会社）を設立。
1986年 9月	石川県金沢市に香林坊店を開設し、金沢本店舗を移設するとともに、全店にC I Sを導入。
1986年11月	金沢本店舗跡に商業複合施設「ラブロ片町」を開設。
1994年 3月	高岡店を旧店舗隣接地に開設のオタヤ開発ビルへ移転。
1998年 3月	石川県小松市に小松店を開設。
2000年 3月	新潟証券取引所と東京証券取引所の合併により東京証券取引所市場第二部に上場。
2007年 9月	富山店を富山市総曲輪南地区再開発ビルへ移転。
2010年 4月	長岡店、上越店を閉鎖。
2010年 6月	新潟店、小松店を閉鎖。
2011年 5月	(株)大和ハウジングを閉鎖。
2011年 5月	石川日産自動車販売(株)の株式売却。
2012年 4月	(株)大和服飾研究所を閉鎖。
2012年 5月	(株)大和ハウジングの清算結了。
2012年10月	(株)大和服飾研究所の清算結了。
2014年 3月	商業複合施設「ラブロ片町」を閉鎖。

3【事業の内容】

当社企業グループは（当社、連結子会社6社、持分法適用関連会社1社（2019年2月28日現在）により構成）、百貨店業・その他事業を行っている。各事業における当社及び関係会社の位置付け等は、次のとおりである。

なお、次の部門は「第5 経理の状況 1.(1) 連結財務諸表 注記」に掲げる事業の種類別セグメント情報の区分と同一である。

（百貨店業）

当社は、金沢市・富山市・高岡市において百貨店3店舗を営んでいる。

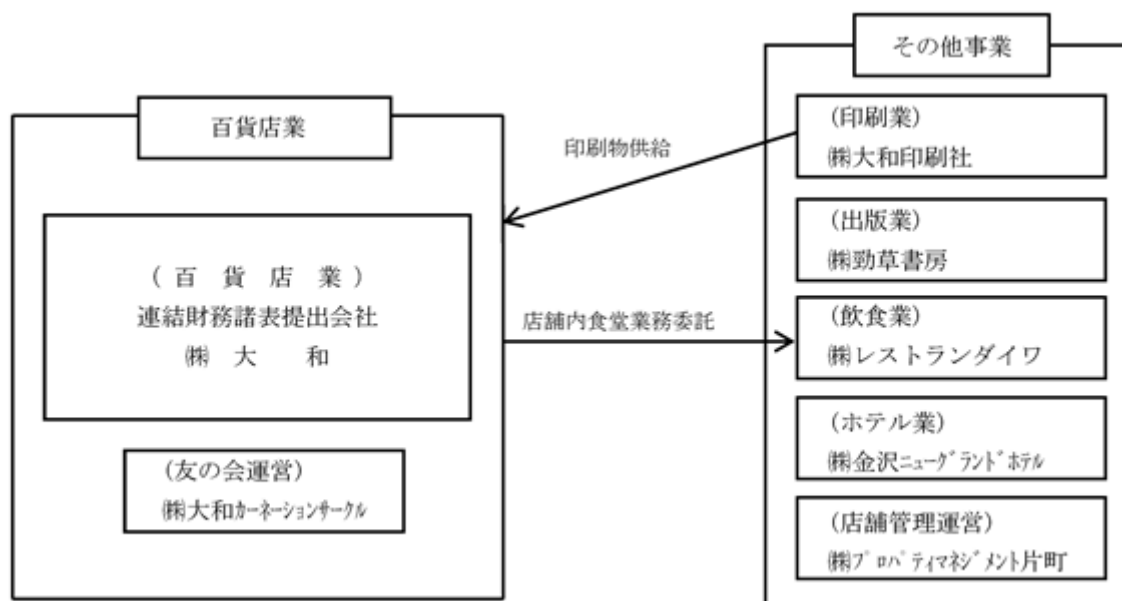
このほか、連結子会社の(株)大和カーネーションサークルが百貨店の友の会運営を行っている。

（その他事業）

主な連結子会社は(株)大和印刷社、(株)勁草書房、(株)レストランダイワ、(株)金沢ニューグランドホテルであり、持分法適用関連会社は、(株)プロパティマネジメント片町である。

〔事業系統図〕

当社企業グループの状況を事業系統図によって示すと、次のとおりである。



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の所 有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 株大和印刷社	石川県金沢市	58	その他事業	100.0	印刷物を発注している 役員の兼任あり
株勤草書房	東京都文京区	50	出版業	100.0	役員の兼任あり
株レストランダイワ (注)2	石川県金沢市	35	その他事業	100.0	当社店舗内食堂の業務委託を行っ ている 事務所を賃貸している 役員の兼任あり
株大和カーネーション サークル	石川県金沢市	90	百貨店業	100.0	資金の預りを行っている 買物券の受入を行っている 債務の連帯保証をしている 事務所を賃貸している 役員の兼任あり
株金沢ニューグランドホ テル	石川県金沢市	80	ホテル業	50.5	商品の仕入をしている 資金援助あり 債務保証をしている 土地及び建物を賃貸している 役員の兼任あり
その他1社					
(持分法適用関連会社) 株プロパティマネジメン ト片町	石川県金沢市	420	その他事業	33.3	建物を賃貸している 役員の兼任あり

(注)1. 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載している。

2. 債務超過会社で債務超過の額は、2019年2月末時点で68百万円である。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年2月28日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
百貨店業	488(-)
ホテル業	124(9)
出版業	30(3)
その他事業	72(-)
計	714(12)

- (注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は、年間の平均人員を()外数で記載している。
2. (株)大和カーネーションサークルの従業員は、(株)大和従業員が兼務している。

(2) 提出会社の状況

2019年2月28日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
488(-)	44.0	15.1	3,403,000

- (注) 1. 従業員数は就業人員である。
2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでいる。

(3) 労働組合の状況

提出会社の従業員の組織する労働組合は、全大和労働組合(加盟人員405人)と称し、U A ゼンセンに所属している。

労働組合との関係は、相互信頼にもとづき良好であり、特記すべき事項はない。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

(1) 会社の経営の基本方針

当社企業グループは、大きく変化する市場環境に適応するため、主力の百貨店業において、「ライフスタイル・ソリューション型百貨店」の構築を目指し、マーケット対応力の向上を機軸として「お客様の暮らしに新たな価値を創造する」ことに注力し、その確かな実行を通して安定的収益・財務基盤の確立につなぐことを経営ビジョンとしている。

また、当社企業グループは、グループ内各社それぞれが自立的に経営効率向上と利益創出を目指すとともに、コンプライアンス経営の浸透強化に取り組んでいく。

(2) 目標とする経営指標

当社企業グループの経営目標数値は以下のとおりである。

2019年度

・連結売上高	443億円
・連結営業利益	3億円

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社企業グループとしては、主力の百貨店業において、益々多様化・個性化するお客様のご要望を捉え、上質で専門性ある商品とデイリー商品とのバランス感のとれた営業活動に努め、地域社会に貢献する百貨店を目指していく。尚、今後については、香林坊店と富山店に経営資源を集中し、将来の安定的収益基盤の確立を図るべく、百貨店の存在価値を高めるための、新たな「商品」や「企画」の開発に取り組むとともに、次なる成長戦略構築に全力を傾注していく。

また、グループ各社は営業力強化とローコスト経営の両輪により、それぞれが確実に利益を生み出す「自主自立経営」の確立を目指していく。

(4) 会社の対処すべき課題

当社を取り巻く経営環境は、業際を超えた競争激化や顧客ニーズが益々多様化するなど、今後も厳しい状況が続くものと予測される。

こうした状況の中、百貨店事業の更なる営業力強化に向け、下記の課題に取り組んでいく。

売れる商品・企画の開発力強化

次世代顧客を取り込む新規ブランド商品の導入、大和ならではの商品・企画・催事の開発および展開

市場への発信力強化

富裕層ニーズの深掘り、地方に広がりつつあるインバウンドニーズの取り込み、広域集客に向け販促活動エリアを拡大

店頭販売力の強化

新商品発掘による商品知識の習得、情報収集力・共有力の向上、取引先との協働関係強化による販売サービス力向上

成長分野の強化

Webビジネスの更なる業容拡大、小型店ビジネスの生産性向上

CSR経営の徹底

個人情報の保護管理をはじめとした各種法令遵守、更なる厳正な業務運営の推進

2【事業等のリスク】

当社企業グループにおける事業等に関わる主要なリスク及び投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがある。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末（2019年2月28日）現在において、当社企業グループが判断したものであり、事業等のリスクをすべて網羅したのではなく、これらに限られるものではない。

（1）事業環境について

当社企業グループの主要なセグメントは、店頭販売を主とする百貨店業を営んでおり、国内における景気や消費動向等さらに市場競争の状況により、当社企業グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況等が影響を受ける可能性がある。

（2）法的規則等

当社企業グループは、大規模小売店舗立地法や独占禁止法の他、食品の安全管理、消費者保護、環境・リサイクルなどに関する法令等に十分留意した営業活動を行っている。

万一、不測の事態が生じた場合には、企業活動が制限される可能性があり、当社企業グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況等に影響を及ぼす可能性がある。

（3）自然災害等

当社企業グループの主要なセグメントである百貨店業などは、店舗による事業展開を行っているため、自然災害・事故等により、店舗の営業継続に悪影響をきたす可能性がある。自然災害などの事故に対しては、緊急時の社内体制の整備や事故発生防止の教育体制を整備しているが、大規模な自然災害や事故が発生した場合には、当社企業グループの営業活動に著しい支障が生じ、財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況等に影響を及ぼす可能性がある。

（4）商品取引

当社企業グループの主要なセグメントである百貨店業は、消費者と商品取引を行っている。提供する商品については、適正な商品であることや安全等に十分留意しているが、万一欠陥商品や食中毒を引き起こす商品等、瑕疵のある商品を販売した場合、公的規制を受ける可能性があるとともに、製造物責任や損害賠償責任等による費用が発生する可能性がある。また、消費者から信用失墜による売上高の減少等、当社企業グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況等に影響等を及ぼす可能性がある。

（5）顧客情報の管理

顧客情報の管理については、社内規程等の整備や従業員教育などによりその徹底を図っているが、万一、不測の事態が生じた場合には、当社企業グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況等に影響を及ぼす可能性がある。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

（1）経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社企業グループ（当社、連結子会社及び持分法適用関連会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりである

財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度のが国経済は、企業収益や雇用環境の改善を背景に、緩やかな景気回復基調で推移した。

百貨店業界においては、高額消費やインバウンド効果が大きかった大都市圏は堅調に推移したが、地方においては総じて厳しい商況が続いた。

この期間、当社企業グループとしては、主力の百貨店業においては、利益性を重視した営業活動を強化するとともに、グループ全体の経営効率改善に努め、業績向上に取り組んできた。一方で、売上高の低迷が続く高岡店については、2019年8月25日（予定）に営業を終了することとした。

この結果、当連結会計年度の財政状態及び経営成績は以下のとおりとなった。

a．財政状態

当連結会計年度末における総資産は、282億2千7百万円となり、前連結会計年度末に比べ57億7千2百万円減少した。これは主に、高岡店の営業終了に伴い、差入保証金等に対する貸倒引当金が増加したことによるものである。

また、負債については、249億1百万円となり、前連結会計年度末に比べ6億3千万円減少した。これは主に、有利子負債が減少したことによるものである。

純資産については、33億2千5百万円となり、前連結会計年度末に比べ51億4千1百万円減少した。これは主に、親会社株主に帰属する当期純損失の計上により、利益剰余金が減少したことに加え、保有する有価証券の時価評価に伴い、その他有価証券評価差額金が減少したことなどによるものである。

b．経営成績

連結業績は、売上高456億2千7百万円（前期比0.3%増）、営業利益3億7千5百万円（同200.4%増）、経常利益3億7百万円（同140.5%増）となったが、高岡店の営業終了に伴う特別損失の計上により、親会社株主に帰属する当期純損失は47億5千2百万円（前期は8千9百万円の親会社株主に帰属する当期純利益）となった。

セグメントごとの状況は次のとおりである。

百貨店業においては、お客様満足の実現に向け「ライフスタイル・ソリューション型百貨店」づくりを目指した取り組みを進めてきた。

営業面については、常に「マーケット起点」「お客様志向」に立った日々の営業活動に努め、売場の魅力向上に取り組んできた。

各店においては、香林坊店では、昨年3月以降、好調な化粧品コーナーを拡充し、新規に4ブランドを導入する等、積極的に売場改装を実施し、顧客層の拡大に努めてきた。富山店では、物産催事やバレンタイン商戦における「ショコラの祭典」など季節歳時記企画の充実強化を図り、マーケット対応力の向上に取り組んできた。

併せて、Webビジネスにおいては、昨年10月に「楽天市場」に出店する等、新たな販路と顧客の開拓にも取り組んできた。

売上高については、化粧品をはじめとした雑貨やラグジュアリーブランドを中心に身回品が好調に推移し、香林坊店が対前年2.4%増と伸長し、全店合計においても前年実績を上回った。

また、利益面においても、引き続き、きめ細かい経費管理を行い、販売管理費の圧縮に取り組み、利益確保に努めてきた。

この結果、百貨店業の業績は、売上高431億4千6百万円（前期比0.3%増）、経常利益2億4千万円（同512.2%増）となった。

ホテル業においては、宿泊部門が概ね堅調に推移し、売上高15億3千6百万円（前期比3.8%減）、経常利益3千3百万円（同68.3%減）となった。

出版業においては、大口受注もあり、売上高7億7千2百万円（前期比8.6%増）、経常利益3千5百万円（前期比23.1%増）となった。

その他事業では、きめ細かな販売管理費のコントロールにより、売上高9億6千5百万円（前期比2.2%減）、経常損失0百万円（前期は1千9百万円の経常損失）となった。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における「現金及び現金同等物の期末残高」は、店舗閉鎖に係る特別損失の計上等により、税金等調整前当期純損失が47億3百万円（前期は1億2千5百万円の税金等調整前当期純利益）と減少したものの、店舗閉鎖損失の加算もあり、前連結会計年度末と比較して、1億9千3百万円減少し、16億6千1百万円となった。

当連結会計年度の「営業活動によるキャッシュ・フロー」は、減価償却費9億2千1百万円等により、8億8千8百万円の増加（前期比32.8%減）となった。

「投資活動によるキャッシュ・フロー」は、有形固定資産の取得による支出4億1千5百万円及び有形固定資産の売却による収入1億2千1百万円および投資有価証券の売却による収入1億1千7百万円等により、1億5千5百万円の減少（前期は7億2千万円の増加）となった。

「財務活動によるキャッシュ・フロー」は、短期借入金の減少2億1千2百万円、長期借入金返済による支出5億8千万円等により、9億2千6百万円の減少（前期比43.1%減）となった。

生産、受注及び販売の実績

a.販売実績

当連結会計年度における販売実績を事業の種類別セグメントごとに示すと、次のとおりである。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)	前期比(%)
百貨店業(百万円)	43,146	100.3
ホテル業(百万円)	1,536	96.2
出版業(百万円)	772	108.6
その他(百万円)	965	97.8
調整額(百万円)	793	-
合計(百万円)	45,627	100.3

(注) 1. セグメント間の取引については、「調整額」欄で調整している。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれていない。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社企業グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりである。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものである。

重要な会計方針及び見積り

当社企業グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されている。その作成にあたっては、経営者による会計方針の選択・適用、資産・負債や収益・費用の金額に影響を与え、見積りを必要としている。経営者はこれらの見積りについて、過去の実績等を勘案し、合理的に判断しているが、実際の結果は見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合がある。

当社企業グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針は、第5「経理の状況」の1.「連結財務諸表等」の「連結財務諸表作成の基本となる重要な事項」に記載している。

当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

a. 経営成績等

1) 財政状態

当連結会計年度末における総資産は、282億2千7百万円となり、前連結会計年度末に比べ57億7千2百万円減少した。これは主に、高岡店の営業終了に伴い、差入保証金等に対する貸倒引当金が増加したことによるものである。

また、負債については、249億1百万円となり、前連結会計年度末に比べ6億3千万円減少した。これは主に、有利子負債が減少したことによるものである。

純資産については、33億2千5百万円となり、前連結会計年度末に比べ51億4千1百万円減少した。これは主に、親会社株主に帰属する当期純損失の計上により、利益剰余金が減少したことに加え、保有する有価証券の時価評価に伴い、その他有価証券評価差額金が減少したことなどによるものである。

2) 経営成績

当社企業グループの当連結会計年度の業績は、売上高456億2千7百万円（前期比0.3%増）、営業利益3億7千5百万円（同200.4%増）、経常利益3億7百万円（同140.5%増）となったが、高岡店の営業終了に伴う特別損失の計上により、親会社株主に帰属する当期純損失は47億5千2百万円（前期は8千9百万円の親会社株主に帰属する当期純利益）となった。

（売上高）

百貨店業において、お客様満足の実現に向け「ライフスタイルソリューション型百貨店」づくりを目指した取り組みを進め、営業面においては、常に「マーケット起点」「お客様志向」に立った日々の営業活動に努め、売場の魅力向上に取り組んできた。

各店においては、香林坊店で好調な化粧品コーナーを拡充し、新規に4ブランドを導入する等、積極的な売場改装を実施し、次世代顧客の取り込みに努めた他、富山店では、物産催事や季節歳時記企画の充実強化を図る等、大和ならではの商品・企画・催事の開発及び展開に努め、マーケット対応力の向上に取り組んできた。

併せて、成長分野と位置づけているWebビジネスにおいては、昨年10月に「楽天市場」に出店する等、新たな販路と顧客の開拓にも取り組み、更なる業容の拡大を図ってきた。

その結果、売上高については、化粧品をはじめとした雑貨やラグジュアリーブランドを中心に身回品が好調に推移するなど、香林坊店が対前年2.4%増と伸長し、全店合計においても前年実績を上回った。

（販売費及び一般管理費）

連結の販売費及び一般管理費は、102億7百万円（前期比3.0%減）となった。これまでも情報システム改革など、経営構造改革を継続的に推進してきたが、引き続き物産催事や中元・歳暮ギフト商戦での本社スタッフによる機動的な応援体制や、中元・歳暮期における配送業務の効率化等、きめ細かな経費管理による販売管理費の圧縮に取り組んできた。

（特別損益）

特別利益として、有価証券売却益3千万円を計上している。また、特別損失として、50億4千1百万円を計上しており、主な内容は、高岡店の閉鎖等に伴う店舗閉鎖損失49億8千1百万円である。

3) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況につきましては、「(1) 経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載の通りである。

b. 経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社企業グループの経営に影響を与える可能性のある要因としては、以下のようなものがある。

事業環境

当社企業グループの主要なセグメントは、店頭販売を主とする百貨店業を営んでいるため、国内における景気や消費動向等さらに市場競争の状況に影響を受けると予測される。こうした状況の中、香林坊店と富山店に経営資源を集中し、将来の安定的収益基盤の確立を図るべく、百貨店の存在価値を高めるための、新たな「商品」や「企画」の開発に取り組むとともに、次なる成長戦略構築に全力を傾注していく。

法的規則等

当社企業グループは、大規模小売店舗立地法や独占禁止法の他、食品の安全管理、消費者保護、環境・リサイクルなどに関する法令等に十分留意した営業活動を行っているが、不測の事態が生じた場合には、企業活動が制限され、経営成績等に影響を与える可能性がある。このため、厳正な業務運営の推進を徹底し各種法令の遵守に努めていく。

自然災害等

主要なセグメントである百貨店業などは、店舗による事業展開を行っているため、自然災害・事故等により、店舗の営業継続に悪影響を来す可能性がある。緊急時の社内体制の整備や事故発生防止の教育体制を整備し、自然災害などの事故の発生に備える取り組みを進めていく。

商品取引

主要なセグメントである百貨店業は、消費者と商品取引を行っており、万一欠陥商品や食中毒を引き起こす商品等、瑕疵のある商品を販売した場合、公的規制を受けるとともに、製造物責任や損害賠償責任等による費用の発生、消費者からの信用失墜による売上高の減少などのリスクがある。このため提供する商品については、適正な商品であることや安全等に十分留意しているほか、「表示」や「安全衛生」に関しては、全社的に第三者機関の現状調査による指導および研修を開催するなどリスクの低減を図っていく。

c. 資本の財源及び資金の流動性

当社企業グループの運転資金需要の主なものは、商品、原材料等の仕入、販売費及び一般管理費等の営業費用に係るものである。

また投資資金需要の主なものは、営業用店舗の売場改装・設備の修繕、機械装置等の更新に係る設備投資資金である。

運転資金と設備投資資金については、営業キャッシュ・フロー獲得額による自己資金での充当を基本としているが、必要に応じて取引金融機関からの資金調達を実施している。

d. セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況の認識及び分析・検討内容

百貨店業の業績は、化粧品をはじめとした雑貨やラグジュアリーブランドを中心に身回品が好調に推移し、売上高431億4千6百万円（前期比0.3%増）となった。利益面でも、きめ細かい経費管理を行い販売管理費の圧縮に取り組み、経常利益2億4千万円（同512.2%増）となった。

ホテル業においては、宿泊部門が概ね堅調に推移したが、宴会受注減等の影響により、売上高15億3千6百万円（前期比3.8%減）、経常利益3千3百万円（同68.3%減）となった。

出版業においては、大口受注もあり、売上高7億7千2百万円（前期比8.6%増）、経常利益3千5百万円（前期比23.1%増）となった。

その他事業では、売上高9億6千5百万円（前期比2.2%減）となったが、きめ細かな販売管理費のコントロールにより、経常損失0百万円（前期は1千9百万円の経常損失）となった。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項なし

5 【研究開発活動】

該当事項なし

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資については、全体で483,754千円の設備投資を実施した。

〔百貨店業〕

お客様満足の実現に向け、「ライフスタイル・ソリューション型百貨店」づくりを目指した取り組みを進め、常に「マーケット起点」「お客様志向」に立った日々の営業活動に努め、売場の魅力向上に取り組むとともに、顧客層の拡大と更なるマーケット対応力の強化を目指し、各店舗の売場改装・附属設備の改修等に450,340千円の設備投資を行なった。

〔その他事業〕

各社の専門性をいかし、それぞれの事業分野で経営効率向上と収益力強化を図るため、建物設備の維持更新工事を含めて33,413千円の設備投資を行った。

なお、設備の状況における事項の記載については、消費税等抜きの金額を表示している。

2【主要な設備の状況】

当社企業グループ（当社及び連結子会社）における主要な設備は、以下のとおりである。

(1) 提出会社

2019年2月28日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (人)
			建物及び構築物	車輛及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
香林坊店及び本社 (金沢市香林坊・片町他)	百貨店業	店舗等	4,425,186	5,795	2,967,938 (5,137)	58,659	7,457,579	241
富山店 (富山市総曲輪他)	百貨店業	店舗等	3,446,617	3,483	1,951,138 (6,472)	2,797	5,404,036	186
高岡店 (高岡市御旅屋町)	百貨店業	店舗等	32,341	-	1,548 (911)	367	34,256	61

(2) 国内子会社

2019年2月28日現在

会社名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(千円)					従業員数 (人)
			建物及び構築物	機械装置及び運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
㈱大和印刷社 (石川県金沢市)	その他事業	工場等	19,248	111,013	89,026 (2,571)	6,120	225,411	37
㈱勁草書房 (東京都文京区)	出版業	事務所等	147,802	0	291,856 (378)	1,073	440,732	33 (3)
㈱レストランダイワ (石川県金沢市)	その他事業	店舗等	0	-	- (-)	0	0	35
㈱金沢ニューグランドホテル (石川県金沢市)	ホテル業	ホテル設備等	1,059,773	676	1,900,788 (1,948)	68,010	3,029,249	133 (9)

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は器具及び備品である。
2. 従業員数の()は、臨時雇用者数を外書している。

3【設備の新設、除却等の計画】

重要な設備の新設、除却等の計画は、以下のとおりである。

- (1) 新設
該当事項なし

(2) 改修

会社名	所在地	セグメントの名称	設備の内容	投資予定額		資金調達方法	着手及び完了予定		完成後の増加能力
				総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了	
㈱大和	石川県金沢市	百貨店業	売場・設備改修	550	-	自己資金	2019年3月	2020年2月	-

- (注) 上記の金額には、消費税等は含まれていない。

(3) 除売却

経常的な設備の更新の為の除売却を除き、重要な設備の除売却の計画はない。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	16,000,000
計	16,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (2019年2月28日)	提出日現在発行数(株) (2019年5月30日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	6,003,400	6,003,400	東京証券取引所 (市場第二部)	単元株式数 100株
計	6,003,400	6,003,400	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項なし

【ライツプランの内容】

該当事項なし

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項なし

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】
該当事項なし

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金残 高(千円)
2017年9月1日	24,013,600	6,003,400	-	3,462,700	-	1,151,981

(注) 普通株式5株につき1株の割合で株式を併合したことによる発行済株式総数の減少である。

(5) 【所有者別状況】

2019年2月28日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株 式の状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その 他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	12	14	195	9	6	3,550	3,786	-
所有株式数 (単元)	-	9,200	2,332	14,405	139	20	33,273	59,369	66,500
所有株式数の割 合(%)	-	15.49	3.92	24.26	0.23	0.03	56.04	100.00	-

(注) 自己株式391,529株は、「個人その他」に3,915単元、及び「単元未満株式の状況」に29株を含めて記載している。

(6) 【大株主の状況】

2019年2月28日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
宮 二郎	石川県金沢市	524	9.34
倉敷紡績株式会社	大阪市中央区久太郎町二丁目4-31	292	5.21
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目2-1	285	5.08
一般財団法人大和文化財団	石川県金沢市香林坊一丁目1-1	200	3.56
株式会社北國銀行	石川県金沢市広岡二丁目12-6	192	3.42
株式会社北陸銀行	富山県富山市堤町通り一丁目2-26	181	3.22
清水建設株式会社	東京都中央区京橋二丁目16-1	165	2.94
ダイダン株式会社	大阪市西区江戸堀一丁目9-25	152	2.72
松井証券株式会社	東京都千代田区麹町一丁目4	151	2.70
株式会社大市社	石川県金沢市片町二丁目2-5	144	2.56
計	-	2,290	40.80

(注) 上記のほか、自己株式が391千株ある。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2019年2月28日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 391,500	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 5,545,400	55,454	-
単元未満株式	普通株式 66,500	-	1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	6,003,400	-	-
総株主の議決権	-	55,454	-

【自己株式等】

2019年2月28日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社大和	金沢市片町二丁目2番5号	391,500	-	391,500	6.52
計	-	391,500	-	391,500	6.52

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項なし

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	724	404,536
当期間における取得自己株式	92	50,600

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年5月1日からこの有価証券報告書提出日迄の単元未満株式の買取りによる株式は含まれていない。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
保有自己株式数	391,529	-	391,621	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年5月1日からこの有価証券報告書提出日迄の単元未満株式の買取りによる株式は含まれていない。

3【配当政策】

当社は、事業の成長と企業体質の強化に努め、変化する経営環境や収益状況など総合的に勘案し、実施することを基本方針としている。

当社は、中間配当と期末配当の2回の剰余金の配当を行うことができるが、剰余金の配当の決定機関は、機動的な資本政策の遂行を目的として取締役会としている。

当期の配当については、売上高の低迷が続く高岡店の営業終了に伴う特別損失の計上により、当期純損失を計上することとなったため無配とした。

今後については、収益構造の抜本的改善を図ることにより、内部留保を高め、財務体質の一層の健全化に努め、株主各位のご期待にそえるよう努力する。

4【株価の推移】

(1)【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第99期	第100期	第101期	第102期	第103期
決算年月	2015年2月	2016年2月	2017年2月	2018年2月	2019年2月
最高(円)	318	365	166	649 (129)	587
最低(円)	97	145	99	522 (104)	515

(注) 1. 最高・最低株価は東京証券取引所市場第二部におけるものである。

2. 2017年9月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行ったため、第102期の株式については株式併合後の最高・最低株価を記載し、()内に株式併合前の最高・最低株価を記載している。

(2)【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	2018年9月	10月	11月	12月	2019年1月	2月
最高(円)	579	573	555	549	562	570
最低(円)	542	541	536	515	540	541

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所市場第二部におけるものである。

5【役員の状況】

男性10名 女性 - 名 (役員のうち女性の比率 - %)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役社長 (代表取締役)		宮 二郎	1957年4月5日生	1981年10月 当社入社 1987年3月 当社営業本部副本部長 1987年5月 当社取締役 1989年5月 当社常務取締役 1990年3月 当社経営戦略室長 1993年5月 当社専務取締役 1997年5月 当社代表取締役副社長 1999年5月 当社代表取締役社長(現任)	(注)2	524
専務取締役 (代表取締役)		寺口 時弘	1955年1月30日生	1978年4月 当社入社 2007年2月 当社業務開発本部長 2007年5月 当社取締役 2011年3月 当社業務本部長 2011年5月 当社常務取締役 2015年5月 当社代表取締役・専務取締役(現任)	(注)2	2
常務取締役	営業本部長・ 香林坊店長	岡本 志郎	1963年5月5日生	1986年4月 当社入社 2015年2月 当社富山店長 2015年5月 当社取締役 2018年2月 当社営業本部長・香林坊店長(現任) 2018年5月 当社常務取締役(現任)	(注)2	2
取締役	経営戦略室長	小泉 敏	1955年9月4日生	1979年4月 ㈱大丸入社 2005年3月 ㈱大丸 グループ本社管理本部 コスト構造改革推進部シェアード推 進担当部長 2010年6月 当社出向経営戦略本部副本部長 2011年3月 当社入社経営戦略本部副本部長 2015年3月 当社経営戦略室長(現任) 2015年5月 当社取締役(現任)	(注)2	1
取締役	富山店長	中崎 俊也	1958年7月12日生	1981年4月 当社入社 2005年3月 当社富山店営業第2部長 2018年2月 当社富山店長(現任) 2018年5月 当社取締役(現任)	(注)2	1
取締役	業務本部長	坂本 哲治	1965年7月13日生	1988年4月 当社入社 2013年3月 当社業務本部副本部長 2018年2月 当社業務本部長(現任) 2018年5月 当社取締役(現任)	(注)2	1

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 (常勤監査等委員)		北村 秀明	1946年2月13日生	1968年4月 当社入社 2003年3月 当社新潟店長 2003年5月 当社取締役 2011年5月 当社常勤監査役 2016年5月 当社取締役(常勤監査等委員)(現任)	(注)3	2
取締役 (監査等委員)		細川 清悦	1943年1月2日生	2000年7月 富山税務署長 2001年7月 金沢国税局退職 2001年9月 税理士登録 2003年7月 当社監査役 2016年5月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)3	0
取締役 (監査等委員)		中村 太郎	1964年9月30日生	1991年4月 中村酒造株式会社入社 1996年7月 中村酒造株式会社代表取締役社長 (現任) 2014年5月 当社監査役 2016年5月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)3	-
取締役 (監査等委員)		浜崎 英明	1954年6月25日生	1978年4月 株式会社北國銀行入行 2009年6月 株式会社北國銀行取締役兼執行役員 営業統括部長 2012年6月 株式会社北國銀行常務取締役兼執行 役員営業統括部長 2015年5月 当社監査役 2016年4月 株式会社北國銀行専務取締役(現 任) 2016年5月 当社取締役(監査等委員)(現任)	(注)3	-
計						534

- (注) 1. 取締役 細川清悦、中村太郎及び浜崎英明は、社外取締役である。
2. 2019年5月23日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
3. 2018年5月24日開催の定時株主総会の終結の時から2年間

6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの状況】

(1) コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、1923年創業以来、店祖遺訓「正しきを履んで怖れず真剣たれ」を常に企業活動の信条・従業員の行動指針と掲げ、顧客・株主・取引先・従業員そして社会公共に対する使命を果たすことを使命としてきた。

北陸の地に根ざす百貨店として、地域の皆様に信頼いただく事こそが企業活動の根幹と認識しており、コーポレート・ガバナンスの体制整備はその信頼を永続的にいただくために必要不可欠なものであり、社会規範とお客様のご満足を最優先した体制整備と開示に努めていく所存である。

当連結会計年度末現在、当社は監査等委員会設置会社の経営執行体制を採っているが、これは議決権のある監査等委員である取締役をおき、取締役会の監督機能を強化することにより、一層のコーポレート・ガバナンスの充実を図ることが、株主利益に通ずるものと考えらるからである。

当社をはじめ当社企業グループは、今後とも地域に貢献できる企業として法令順守をはじめとする企業倫理に根ざした経営を推進し、時々の状況に即したコーポレート・ガバナンスの体制整備を続けていく所存である。

(2) 企業統治の体制

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

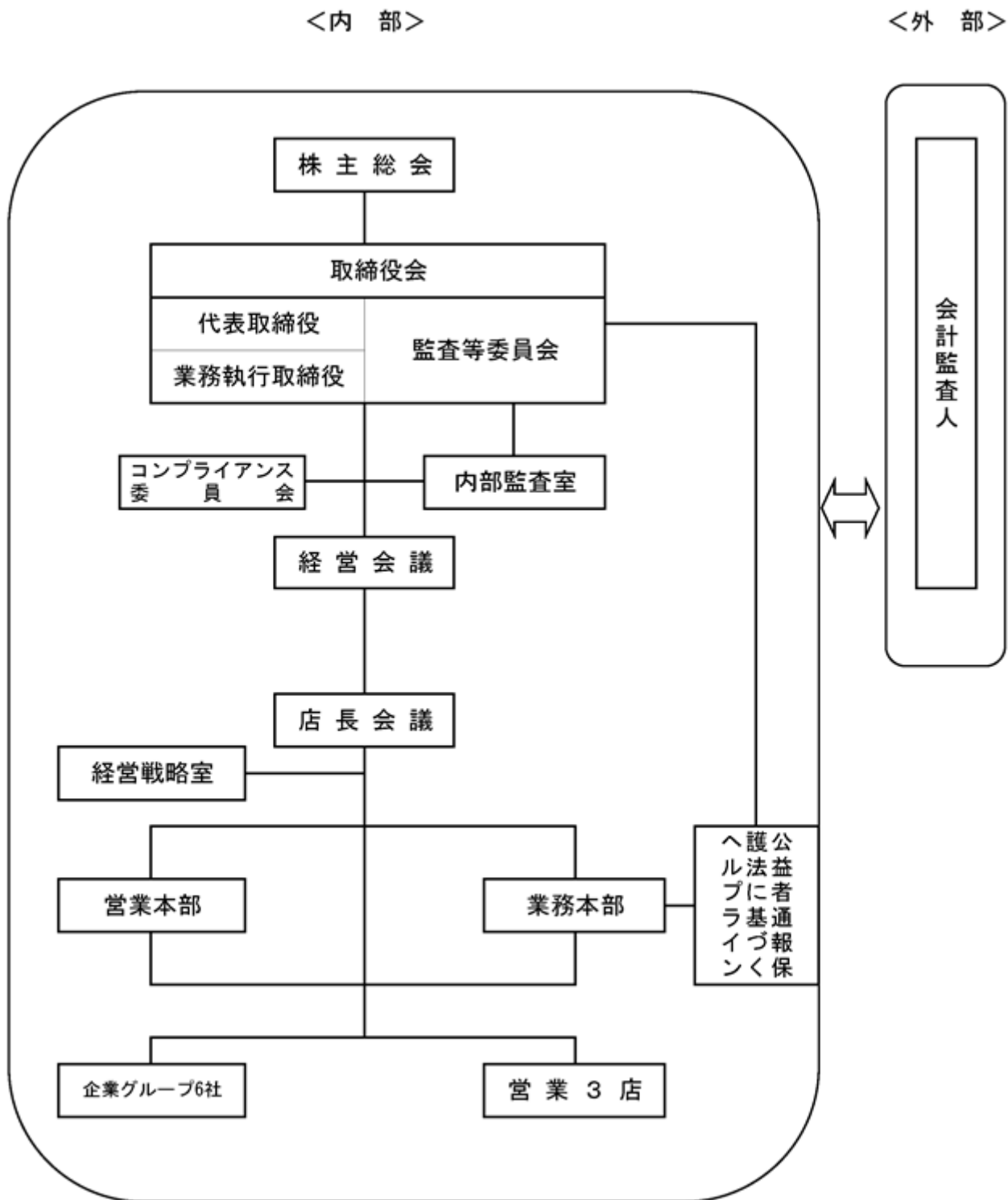
当社は2016年5月26日開催の定時株主総会をもって、監査役会設置会社から監査等委員会設置会社に移行した。以下のコーポレート・ガバナンスの状況については、この有価証券報告書提出日現在のものを記載している。

当社の取締役会は取締役（監査等委員である取締役を除く）6名及び監査等委員である取締役4名で構成しており、うち社外取締役は3名である。経営会議は本社在籍取締役で構成しており、現在6名である。なお、当社の取締役は17名以内とする旨定款に定めている。

当社及び当社企業グループでは、新たな監査等委員会設置会社制度下における内部統制システムの基本方針に基づき取締役の職務執行の監督・監査体制を整えている。

また監査等委員会の機能が有効に果たされるよう、監査等委員会監査を支える体制を構築し、独立性の高い社外取締役（監査等委員）及び財務・会計に関する知見を有する取締役（監査等委員）を選任している。監査等委員会設置会社へ移行することで、監査等委員である取締役が取締役会での議決権を有することにより監査・監督機能が強化され、当社のコーポレート・ガバナンス体制を一層充実させることができるものと判断し、現状のガバナンスを採用している。

会社の機関及び内部統制システムの関係図（2019年5月30日現在）



その他の企業統治に関する事項

当社では内部統制を、経営の有効性・効率性を高め、財務報告の信頼性を確保し、経営に関わる法令の順守を目的とし、業務が適正かつ効果的に遂行されるために、社内に構築され、運用される体制およびプロセスと認識している。

(1) 取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保する体制

- ・ 社長、本部長、室長、副本部長、副室長、内部監査室長、常勤監査等委員に加え各店運営責任者（店長）が参画する「コンプライアンス委員会」を設置しており、この委員会活動を中核に、取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保する体制をとる。
- ・ 内部統制システムの一環として、独立機関として監査等委員会を設置しており、企業倫理と法令順守、企業の健全性に軸足を置いた業務監査を実施する。
- ・ 内部監査部門として内部監査室を設置しており、当社および企業グループの日常業務・運営の内部監査を行い、その業務プロセスの適正性、有効性を検証し、重要な事項については、取締役会、監査等委員会等へ適切に報告する体制をとる。

(2) 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

- ・ 取締役会議事録、稟議書、各種契約書、その他職務の執行に係る重要情報を適切に保存・管理する。
- ・ 個人情報の管理については「個人情報保護管理規程」および関連規準・マニュアルを順守するとともに、個人情報を取扱う取引先とも契約書を締結、台帳の施錠保管の徹底、シュレッダーの配備実施等保護施策に取り組む。

(3) 損失の危険の管理に関する規定その他の体制

- ・ 業務執行上の重要な意思決定ないし事業遂行等に内在するリスクは、社長、本部長、室長、副本部長、副室長、常勤監査等委員、各店運営責任者（店長）が一堂に会する店長会議において審議、管理する。
- ・ 緊急事態の発生、あるいは緊急事態につながるおそれのある事実が判明した際の危機管理対応は、情報開示も含む対応策を協議し、迅速かつ適正な対応を行う。

(4) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ・ 取締役会は、原則として年5回以上開催し、経営全般に係る意思決定を行う。
- ・ 社長、本部長、室長、副本部長、副室長、常勤監査等委員による経営会議は、経営課題を見極め取締役会に付議される案件の検討等経営に関わる事項について協議する。
- ・ 店長会議を原則毎月開催し、実務的な業務執行の協議ならびに具体的な取り組みについて決定する。

(5) 財務報告の信頼性を確保するための体制

- ・ 企業グループ全体の財務報告の信頼性を確保するため、金融商品取引法その他の関係法令に基づく内部統制の整備、運用の体制および評価に関する基本方針を定め、適正に機能することを継続的に評価し、必要な場合は適宜改善を行う。

(6) 当社およびその子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

- ・ 企業グループ全体での一体的な企業統治を図るため、本社経営戦略室において室長、副室長、事業開発部長、子会社取締役による会議を定期的開催し、業績や財務状況について子会社取締役から報告を受け、グループ各社の経営状況やリスクを掌握の上、必要な場合は支援、助言を実施する。
- ・ 子会社取締役会において重要な事項の意思決定を諮ることとし、室長、副室長、事業開発部長が出席することにより、企業グループ全体の経営執行を把握できる体制をとる。
- ・ 企業グループ全体の内部統制を徹底するため、グループ各社の内部統制システム構築に努める。

(7) 監査等委員会を補助する使用人体制とその独立性ならびに当該使用人に関する実効性の確保に関する体制

- ・ 取締役（監査等委員である取締役は除く）は、監査等委員会の求めにより監査等委員会の職務を補助する従業員として適切な人材を配置することとし、その従業員の人事に関する事項は、監査等委員会と協議のうえ決定する。
- ・ 当該使用人が、他部署の使用人を兼務する場合、他部署の業務と同等以上に監査等委員会に係る業務に従事するものとする。

(8) 当社およびその子会社から成る企業集団の取締役・監査役および使用人等が監査等委員会に報告するための体制および報告をした者が不利益な取り扱いを受けないことを確保するための体制

- ・ 監査等委員には取締役会および重要な会議に出席を依頼するほか、必要に応じて担当部門およびグループ各社の取締役・監査役・使用人等から報告・説明等を行う。
- ・ 「公益通報者保護法に関する社内規程」を企業グループ全体に適用し、取締役および使用人ならびにグループ各社の取締役・監査役・使用人等は、重大な法令違反、定款違反、企業集団に著しい損害を及ぼす事実や不正な行為を発見した場合、すみやかに監査等委員にその事実を報告する。また、監査等委員会へ当該報告を行った者に対し、当該報告をしたことを理由とし、不利益な取り扱いをすることを禁止するものとする。

- (9)その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- ・監査等委員は、必要に応じ担当部門に協力を要請することができるものとし、会計監査人に対しては会計監査への臨席検証および税務相談等、助言を求める。
- (10)監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針
- ・監査等委員会がその職務を執行する上で、会社法第399条2第4項に基づく費用の前払い等の請求をしたときは、担当部門で審議の上、当該請求に係る費用または債務が当該監査等委員の職務の執行に必要でない認められた場合を除き、速やかに当該費用または債務を処理することとする。
- (11)反社会的な勢力等との関係断絶に係る体制
- ・反社会的勢力や反社会的勢力等と関係のある取引先・団体とはいかなる取引も一切おこなわないこととし、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的な勢力等からの接触や要求に対しては、毅然とした態度で臨み、不当な要求には一切応じないこととする。また「大和コンプライアンスマニュアル」で反社会的な勢力等との関係断絶について明文化の上、社内周知を徹底し、必要に応じて外部の専門家に相談できる体制をとる。

監査等委員会監査及び内部監査の状況

監査等委員は4名で、社内取締役(常勤)1名と社外取締役3名で構成されている。監査等委員は取締役会の他、経営の重要な会議に出席する等、取締役の職務執行状況については監査等委員会の定める監査の方針及び分担に従い監査を行っている。また、内部監査部門である内部監査室等は、監査等委員会と適宜情報及び意見の交換を行う等密接に連携し、内部統制状況、コンプライアンスの状況など必要な監査を実施するとともに、監査等委員会に対して年次業務監査計画及び結果や社内外の諸情報を報告するなど監査等委員会業務を補佐している。

会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士は、石原鉄也氏および沖聡氏であり、太陽有限責任監査法人に所属している。

当社の会計監査業務に係る補助者は13名であり、うち、公認会計士10名、その他3名である。

当社と会計監査人は、会社法第427条第1項に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償の限度額は法令が規定する最低責任限度額である。

また、当社は、会計監査人が継続して職責を全うするうえで、重要な疑義を抱く事象が発生した場合には、監査等委員会の決議に基づき、解任または不選任に関する議案を株主総会へ上程する方針である。

社外取締役

当社における社外取締役は監査等委員である社外取締役3名である。

当社では、社外取締役には業務執行の監督を行うことはもとより、経営の意思決定そのものに対する妥当性までを監督し、助言を受けている。

社外取締役は、会計監査人と意思交換を行い相互連携を図るとともに、常勤監査等委員が内部監査室と意見交換を行った内容について常勤監査等委員より報告を受けている。

社外取締役細川清悦氏は、当社株式6百株を保有している。細川氏と当社の間には、当社株式の保有以外、特別な人間関係、取引関係その他利害関係はない。

社外取締役中村太郎氏は、中村酒造株式会社代表取締役社長であり、当社は同社と商品仕入れ取引がある。

社外取締役浜崎英明氏は、株式会社北國銀行専務取締役であり、同行は当社株式を192千株を保有しており、当社は同行より借入金がある。

当社と社外取締役細川清悦氏、中村太郎氏、浜崎英明氏は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく賠償の限度額は法令が規定する最低責任限度額である。

当社は、社外取締役細川清悦氏及び中村太郎氏を東京証券取引所の規程に基づく独立役員として指定し、同取引所に届け出ている。

なお、当社は社外取締役を選任するための独立性に関する基準、方針は定めていないが、東京証券取引所に定める独立役員に関する要件を参考にし、一般株主との利益相反が生じる恐れがなく、実質的に独立した立場にある者を選任している。

(3) リスク管理体制の整備の状況

当社のリスク管理体制は、業務執行上の重要な意思ないし事業遂行等に内在するリスクを取締役および本社各部門責任者、各店運営責任者（店長）が一堂に会する店長会議において審議、管理している。

緊急事態の発生、あるいは緊急事態につながる恐れのある事実が判明した際の危機管理対応は、情報開示を含む対応策を協議し、迅速かつ適正な対応を行うこととしている。

また、当社は経営理念に基づく「コンプライアンス委員会規定」を策定し「コンプライアンス委員会」を設置しており、この委員会活動を中核に全従業員に対する啓蒙活動を行うなど、全社をあげてコンプライアンス経営によるリスク管理に取り組んでいる。また、社内通報窓口・相談窓口として「公益通報者保護法に基づくヘルプライン」を設けて、従業員等から通報・相談を速やかに受け付ける体制を整えており、法令違反および企業倫理に反する恐れのある行為の早期発見と未然防止に努めている。

個人情報漏洩のリスク管理体制については、個人情報保護管理規定・関連規準を整備し、全従業員の教育を実施するとともに、顧客情報の保有に関する問い合わせ等の窓口を設置し、顧客対応を強化、整備する等個人情報の保護管理の徹底を図っている。

(4) 役員報酬の内容

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）				対象となる役員の員数（人）
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役（監査等委員である取締役を除く）	62	62	-	-	-	8
取締役（監査等委員）	15	15	-	-	-	5
（社外役員）	(7)	(7)	(-)	(-)	(-)	(4)

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

当社における役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針は、取締役（監査等委員である取締役を除く）の報酬については、2016年5月26日開催の第100期定時株主総会決議に基づく年額1億7千万円以内を限度として、又監査等委員である取締役の報酬については、2016年5月26日開催の第100期定時株主総会決議に基づく年額3千万円以内を限度として、当社の基準に則り決定している。

(5) 剰余金の配当等の決定機関

当社は、より機能的な配当政策を行なうために、剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨を定款に定めている。

(6) 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めている。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨を定款に定めている。

(7) 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めている。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的としている。

(8) 取締役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議によって同法第423条第1項の行為に関する取締役（取締役であった者を含む）の責任を、法令の限度において免除することが出来る旨を定款に定めている。これは、取締役が職務を執行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的としている。

(9) 株式の保有状況

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 59 銘柄

貸借対照表計上額の合計額 1,963 百万円

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
(前事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
倉敷紡績(株)	2,232,000	794	取引関係の維持・強化のため
(株)ほくほくフィナンシャルグループ	140,700	214	財務活動の円滑化のため
清水建設(株)	208,000	207	取引関係の維持・強化のため
東京海上ホールディングス(株)	41,100	204	取引関係の維持・強化のため
(株)第四銀行	41,500	202	財務活動の円滑化のため
(株)北國銀行	35,100	156	財務活動の円滑化のため
(株)ジャックス	23,000	57	取引関係の維持・強化のため
モロゾフ(株)	3,000	19	取引関係の維持・強化のため
ダイダ(株)	6,500	15	取引関係の維持・強化のため
北陸電力(株)	10,100	8	取引関係の維持・強化のため
(株)三陽商会	1,700	4	取引関係の維持・強化のため
小松マテーレ(株)	2,000	2	取引関係の維持・強化のため
(株)石川製作所	662	1	取引関係の維持・強化のため
トナミホールディングス(株)	300	1	取引関係の維持・強化のため
三谷産業(株)	2,000	0	取引関係の維持・強化のため
(株)レナウン	3,900	0	取引関係の維持・強化のため

(当事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
倉敷紡績(株)	223,200	506	取引関係の維持・強化のため
東京海上ホールディングス(株)	41,100	223	取引関係の維持・強化のため
清水建設(株)	208,000	203	取引関係の維持・強化のため
(株)ほくほくフィナンシャルグループ	140,700	171	財務活動の円滑化のため
(株)北國銀行	35,100	122	財務活動の円滑化のため
(株)第四北越フィナンシャルグループ	31,500	108	財務活動の円滑化のため
(株)ジャックス	23,000	44	取引関係の維持・強化のため
ダイダン(株)	6,500	15	取引関係の維持・強化のため
モロゾフ(株)	3,000	14	取引関係の維持・強化のため
北陸電力(株)	10,100	9	取引関係の維持・強化のため
トナミホールディングス(株)	300	1	取引関係の維持・強化のため
小松マテーレ(株)	2,000	1	取引関係の維持・強化のため
三谷産業(株)	2,000	0	取引関係の維持・強化のため

保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項なし

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	27	-	27	-
連結子会社	-	-	-	-
計	27	-	27	-

【その他重要な報酬の内容】

該当事項なし

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項なし

【監査報酬の決定方針】

当社は監査報酬については、事業の規模や特性、監査公認会計士等より提示された監査計画及び監査報酬見積資料を勘案した上で、決定している。

第5【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成している。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という）に基づいて作成している。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成している。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年3月1日から2019年2月28日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年3月1日から2019年2月28日まで）の財務諸表について、太陽有限責任監査法人により監査を受けている。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握する体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、監査法人等が主催するセミナーへの参加や会計専門誌の定期購読を行っている。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,865,692	1,721,811
受取手形及び売掛金	1,649,062	1,714,570
商品及び製品	1,962,245	1,773,145
仕掛品	18,603	16,187
原材料及び貯蔵品	46,621	38,107
繰延税金資産	98,493	103,383
その他	300,329	454,831
貸倒引当金	30,460	29,015
流動資産合計	5,910,587	5,793,022
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	24,957,996	25,037,360
減価償却累計額及び減損損失累計額	15,250,523	15,867,229
建物及び構築物(純額)	1,970,472	1,917,131
機械装置及び運搬具	779,904	772,447
減価償却累計額	636,100	651,210
機械装置及び運搬具(純額)	143,803	121,237
土地	1,283,727,755	1,282,819,955
その他	1,293,710	1,313,626
減価償却累計額及び減損損失累計額	890,949	955,308
その他(純額)	402,761	358,318
有形固定資産合計	18,626,793	17,931,641
無形固定資産		
施設利用権	1,572	1,572
ソフトウェア	45,359	45,627
無形固定資産合計	46,931	47,200
投資その他の資産		
投資有価証券	1,327,004,410	1,321,175,144
差入保証金	6,538,047	6,432,795
繰延税金資産	49,889	47,311
その他	185,143	196,410
貸倒引当金	58,360	4,396,326
投資その他の資産合計	9,415,130	4,455,334
固定資産合計	28,088,855	22,434,176
資産合計	33,999,443	28,227,199

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	2,909,536	3,010,504
短期借入金	14,950,183	14,417,173
未払法人税等	82,419	49,015
商品券	5,372,159	5,369,717
預り金	3,331,333	3,226,109
賞与引当金	89,152	60,450
ポイント引当金	216,099	213,106
商品券等回収損失引当金	539,908	514,468
店舗閉鎖損失引当金	-	261,000
その他	801,583	780,522
流動負債合計	18,292,375	17,902,067
固定負債		
長期借入金	14,241,413	13,974,718
繰延税金負債	800,123	663,934
再評価に係る繰延税金負債	353,427	353,427
退職給付に係る負債	1,449,254	1,437,852
資産除去債務	214,514	399,234
その他	180,852	170,435
固定負債合計	7,239,586	6,999,603
負債合計	25,531,962	24,901,670
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,462,700	3,462,700
資本剰余金	1,151,981	1,151,981
利益剰余金	2,754,404	2,082,191
自己株式	594,049	594,453
株主資本合計	6,775,036	1,938,036
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	644,761	334,779
土地再評価差額金	871,201	871,201
退職給付に係る調整累計額	72,305	65,524
その他の包括利益累計額合計	1,588,267	1,271,505
非支配株主持分	104,176	115,985
純資産合計	8,467,481	3,325,528
負債純資産合計	33,999,443	28,227,199

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
売上高	45,509,332	45,627,622
売上原価	34,865,994	35,045,210
売上総利益	10,643,337	10,582,412
販売費及び一般管理費	¹ 10,518,418	¹ 10,207,156
営業利益	124,919	375,255
営業外収益		
受取利息	2,308	3,346
受取配当金	46,233	54,484
受取賃貸料	135,827	125,809
長期末回収商品券	360,557	333,046
固定資産受贈益	5,016	1,106
持分法による投資利益	-	1,499
雑収入	26,944	37,933
営業外収益合計	576,885	557,226
営業外費用		
支払利息	139,414	128,027
商品券等回収損失引当金繰入額	262,918	317,868
減価償却費	104,350	107,480
持分法による投資損失	5,442	-
雑損失	61,911	71,867
営業外費用合計	574,037	625,244
経常利益	127,767	307,238
特別利益		
投資有価証券売却益	-	30,388
固定資産売却益	² 125,593	-
特別利益合計	125,593	30,388
特別損失		
店舗閉鎖損失	-	^{3, 4} 4,981,000
固定資産除却損	⁵ 61,012	⁵ 59,147
固定資産売却損	⁶ 607	⁶ 917
貸倒引当金繰入額	58,248	-
その他	7,943	-
特別損失合計	127,812	5,041,065
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	125,548	4,703,438
法人税、住民税及び事業税	55,952	39,520
法人税等調整額	58,004	2,361
法人税等合計	2,051	37,158
当期純利益又は当期純損失()	127,600	4,740,597
非支配株主に帰属する当期純利益	38,561	11,809
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失()	89,038	4,752,406

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
当期純利益又は当期純損失()	127,600	4,740,597
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	130,059	309,981
退職給付に係る調整額	28,428	6,780
その他の包括利益合計	158,488	316,762
包括利益	286,088	5,057,359
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	247,526	5,069,168
非支配株主に係る包括利益	38,561	11,809

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,462,700	1,151,981	2,749,583	593,014	6,771,251
当期変動額					
剰余金の配当			84,217		84,217
親会社株主に帰属する当期純利益			89,038		89,038
自己株式の取得				1,035	1,035
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	-	4,820	1,035	3,785
当期末残高	3,462,700	1,151,981	2,754,404	594,049	6,775,036

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調 整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	514,701	871,201	43,876	1,429,779	65,614	8,266,645
当期変動額						
剰余金の配当				-		84,217
親会社株主に帰属する当期純利益				-		89,038
自己株式の取得				-		1,035
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	130,059	-	28,428	158,488	38,561	197,049
当期変動額合計	130,059	-	28,428	158,488	38,561	200,835
当期末残高	644,761	871,201	72,305	1,588,267	104,176	8,467,481

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,462,700	1,151,981	2,754,404	594,049	6,775,036
当期変動額					
剰余金の配当			84,188		84,188
親会社株主に帰属する当期純損失（ ）			4,752,406		4,752,406
自己株式の取得				404	404
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	4,836,595	404	4,836,999
当期末残高	3,462,700	1,151,981	2,082,191	594,453	1,938,036

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調 整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	644,761	871,201	72,305	1,588,267	104,176	8,467,481
当期変動額						
剰余金の配当						84,188
親会社株主に帰属する当期純損失（ ）						4,752,406
自己株式の取得						404
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	309,981	-	6,780	316,762	11,809	304,952
当期変動額合計	309,981	-	6,780	316,762	11,809	5,141,952
当期末残高	334,779	871,201	65,524	1,271,505	115,985	3,325,528

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	125,548	4,703,438
減価償却費	1,076,509	921,312
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	41,240	18,181
引当金の増減額(は減少)	35,117	58,614
店舗閉鎖損失	-	4,981,000
固定資産除却損	61,012	59,147
固定資産売却損益(は益)	124,985	917
投資有価証券売却及び評価損益(は益)	-	30,388
受取利息及び受取配当金	48,541	57,831
支払利息	139,414	128,027
持分法による投資損益(は益)	5,442	1,499
売上債権の増減額(は増加)	11,673	65,507
たな卸資産の増減額(は増加)	114,439	100,030
仕入債務の増減額(は減少)	111,525	100,967
未払消費税等の増減額(は減少)	83,337	83,165
預り金の増減額(は減少)	85,003	107,666
その他の資産の増減額(は増加)	23,108	163,363
その他の負債の増減額(は減少)	74,720	36,540
小計	1,438,800	1,038,286
利息及び配当金の受取額	48,541	57,831
利息の支払額	139,093	135,137
法人税等の支払額	27,195	72,923
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,321,051	888,056
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	20,176	70,178
定期預金の払戻による収入	50,175	20,177
有形固定資産の取得による支出	245,117	415,765
有形固定資産の売却による収入	848,352	121,449
無形固定資産の取得による支出	14,006	19,824
投資有価証券の取得による支出	-	5,000
投資有価証券の売却による収入	2,063	117,477
差入保証金の差入による支出	341	564
差入保証金の回収による収入	104,766	105,816
その他の支出	6,376	12,610
その他の収入	1,485	3,971
投資活動によるキャッシュ・フロー	720,826	155,051
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の増減額(は減少)	536,183	212,747
長期借入れによる収入	850,000	-
長期借入金の返済による支出	1,788,878	580,958
自己株式の取得による支出	1,035	404
リース債務の返済による支出	70,408	47,866
配当金の支払額	83,151	84,910
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,629,656	926,886
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	412,221	193,881
現金及び現金同等物の期首残高	1,443,390	1,855,612
現金及び現金同等物の期末残高	1,855,612	1,661,731

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 6社

主要な連結子会社名は「第1企業の概況4. 関係会社の状況」に記載しているため、省略している。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数

持分法を適用した関連会社の数 1社

持分法を適用した関連会社の名称 (株)プロパティマネジメント片町

(2) 他の会社等の議決権の20%以上、50%以下を自己の計算において所有しているにもかかわらず関連会社と
しなかった主要な会社等の名称

総曲輪シテイ(株)

金沢都市開発(株)

オタヤ開発(株)

以上の会社等は、出資目的及び取引の状況などの実態から、財務及び営業又は事業の方針の決定に対し、
重要な影響を与えていないため関連会社に含まれていない。

3. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

たな卸資産

商品 主として売価還元法による低価法(貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

その他 先入先出法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

主として定額法を採用している。

なお、主な耐用年数は以下のとおりである。

建物及び構築物 5～60年

機械装置及び運搬具 2～10年

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用している。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいている。

リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上している。

ポイント引当金

ポイントカード会員へ付与したポイントの利用に備えるため、付与ポイント残高から失効ポイント見込額を控除した額を、将来の利用見込額として計上している。

商品券等回収損失引当金

商品券等が負債計上中止後に回収された場合に発生する損失に備えるため、過去の実績に基づく将来の回収見込額等を計上している。

店舗閉鎖損失引当金

店舗の閉鎖に伴い、今後発生が見込まれる損失について、合理的に見積もられる金額を計上している。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

過去勤務費用及び数理計算上の差異の処理方法

過去勤務費用は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により、発生時から費用処理している。また、数理計算上の差異は発生の翌連結会計年度に一括して費用処理している。

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の処理方法

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用については、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上している。

子会社における簡便法の適用

連結子会社は退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用している。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資を計上している。

(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式を採用している。

(会計方針の変更)
該当事項なし

(未適用の会計基準等)

- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 平成30年2月16日)
- ・「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成30年2月16日)

(1) 概要

個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱いが見直され、また(分類1)に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱いが明確化されている。

(2) 適用予定日

2019年3月1日以後開始する連結会計年度の期首から適用予定である。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等の適用による連結財務諸表に与える影響については、現時点で評価中である。

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であり、収益は次の5つのステップを適用し認識される。

ステップ1: 顧客との契約を識別する

ステップ2: 契約における履行義務を識別する

ステップ3: 取引価格を算定する

ステップ4: 契約における履行義務に取引価格を配分する

ステップ5: 履行義務を充足した時に、又は充足するにつれて収益を認識する

(2) 適用予定日

2022年3月1日以後開始する連結会計年度の期首から適用する予定である。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中である。

(表示方法の変更)
該当事項なし

(会計上の見積りの変更)
該当事項なし

(追加情報)
該当事項なし

(連結貸借対照表関係)

1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次のとおりである。

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
建物及び構築物	9,225,125千円	8,724,240千円
土地	8,155,310	8,064,510
投資有価証券	1,208,057	923,986
計	18,588,493	17,712,737

担保付債務は次のとおりである。

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
短期借入金	4,931,468千円	4,406,154千円
長期借入金	4,216,034	3,960,358
計	9,147,502	8,366,512

2 土地の再評価

連結子会社(株)金沢ニューグランドホテルは、土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、事業用の土地の再評価を行い、土地再評価差額金を純資産の部に計上している。

- ・再評価の方法.....土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第四号に定める地価税法第16条に規定する地価税の課税価格の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算出した価額に合理的な調整を行って算定する方法により算出
- ・再評価を行った年月日...2002年2月28日

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
再評価を行った土地の期末における時価と再評価後の帳簿価額との差額	1,135,376千円	1,040,221千円

3 非連結子会社及び関連会社に対するものは次のとおりである。

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
投資有価証券(株式)	199,076千円	200,572千円

(連結損益計算書関係)

1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
給料手当	2,030,716千円	1,986,670千円
賃借料	1,345,298	1,339,863
減価償却費	947,383	789,921
退職給付費用	93,597	54,988
賞与引当金繰入額	89,152	48,450
貸倒引当金繰入額	2,900	1,474
ポイント引当金繰入額	616,610	593,130

2 固定資産売却益の内容は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
土地・建物	125,593千円	- 千円
計	125,593	-

3 店舗閉鎖損失

当社企業グループが計上した店舗閉鎖損失の内訳は次のとおりである。

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

該当事項なし

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

保証金等に係る貸倒引当金繰入額 4,338,000 千円

固定資産に係る減損損失 282,000

その他閉鎖に係る費用(注) 361,000

計 4,981,000

(注) 店舗閉鎖損失引当金繰入額261,000千円は、その他閉鎖に係る費用に含めて表示している。

4 減損損失

当社企業グループは以下の資産グループについて減損損失を計上した。

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

該当事項なし

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

場所	用途	種類
富山県高岡市	店舗等	建物その他

店舗等については継続して収支を把握している単位で、遊休資産については当該資産単独で資産のグルーピングをしている。当該資産グループは、営業終了の意思決定を行ったため、閉鎖時の帳簿価額282,000千円について、回収可能性が見込めないとして減損損失を計上した。

減損損失の内訳は、建物277,274千円、その他4,725千円であり、特別損失の店舗閉鎖損失に含めて表示している。

5 固定資産除却損の内容は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
建物及び構築物	59,944千円	59,147千円
機械装置及び運搬具	841	0
その他	226	0
計	61,012	59,147

6 固定資産売却損の内容は次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
建物及び構築物	- 千円	917千円
機械装置及び運搬具	607	-
計	607	917

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	187,242千円	418,732千円
組替調整額	-	27,388
税効果調整前	187,242	446,121
税効果額	57,182	136,139
その他有価証券評価差額金	130,059	309,981
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	10,980	13,285
組替調整額	17,447	20,065
税効果調整前	28,428	6,780
税効果額	-	-
退職給付に係る調整額	28,428	6,780
その他の包括利益合計	158,488	316,762

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期 首株式数(株)	当連結会計年度増 加株式数(株)	当連結会計年度減 少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	30,017,000	-	24,013,600	6,003,400
合計	30,017,000	-	24,013,600	6,003,400
自己株式				
普通株式	1,944,414	4,965	1,558,574	390,805
合計	1,944,414	4,965	1,558,574	390,805

(注) 1. 当社は、2017年9月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っている。

2. 普通株式の発行済株式総数の減少24,013,600株は株式の併合によるものである。

3. 普通株式の自己株式数の減少1,558,574株は株式併合によるものである。

4. 普通株式の自己株式数増加4,965株は株式併合による端数株式の取得321株、単元未満株式の買取4,644株(株式併合前3,803株、株式併合後841株)によるものである。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項なし

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2017年4月13日 取締役会	普通株式	84百万円	3円	2017年2月28日	2017年5月9日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の 種類	配当金の 総額	配当の原資	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2018年4月12日 取締役会	普通株式	84百万円	利益剰余金	15円	2018年2月28日	2018年5月8日

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首株式数（株）	当連結会計年度増加株式数（株）	当連結会計年度減少株式数（株）	当連結会計年度末株式数（株）
発行済株式				
普通株式	6,003,400	-	-	6,003,400
合計	6,003,400	-	-	6,003,400
自己株式				
普通株式	390,805	724	-	391,529
合計	390,805	724	-	391,529

（注） 普通株式の自己株式の株式数増加724株は、単元未満株式の買取によるものである。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項なし

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2018年4月12日 取締役会	普通株式	84百万円	15円	2018年2月28日	2018年5月8日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

該当事項なし

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に記載されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）	当連結会計年度 （自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）
現金及び預金勘定	1,865,692千円	1,721,811千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	10,079	60,080
現金及び現金同等物	1,855,612	1,661,731

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

(ア) 有形固定資産

工具、器具及び備品

(イ) 無形固定資産

ソフトウェア

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「3. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりである。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社企業グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行等金融機関からの借入により資金を調達している。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されている。当該リスクに関しては、当社企業グループ各社の社内ルールに沿って、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握やリスク低減を図っている。投資有価証券である株式は、主に業務上の関係を有する企業(取引先企業)の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されている。当該リスクに関しては、定期的に時価や取引先企業の財務状況等を把握し、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直している。

営業債務である支払手形及び買掛金は、すべて1年以内の支払期日である。借入金のうち、短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金は主に設備投資に係る資金調達である。変動金利の借入金は、金利の変動リスクに晒されている。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

受取手形及び売掛金は、当社企業グループ各社の社内ルールに沿って、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握やリスク低減を図っている。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

投資有価証券については、定期的に時価や取引先企業の財務状況等を把握し、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直している。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

営業債務や借入金は、流動性リスクに晒されているが、当社企業グループでは、月次で資金繰計画を作成・更新する方法によりリスクを管理するとともに、主要取引銀行との当座借越契約により十分な手許流動性を確保している。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれている。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがある。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりである。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれていない(注)2.参照)。

前連結会計年度(2018年2月28日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	1,865,692	1,865,692	-
(2) 受取手形及び売掛金 貸倒引当金	1,649,062 30,460		
	1,618,601	1,618,601	-
(3) 投資有価証券 其他有価証券	1,896,022	1,896,022	-
(4) 差入保証金	6,538,047	5,956,251	581,795
資産計	11,918,364	11,336,568	581,795
(1) 支払手形及び買掛金	2,909,536	2,909,536	-
(2) 短期借入金	4,190,228	4,190,228	-
(3) 預り金	3,331,333	3,331,333	-
(4) 長期借入金	5,001,368	5,009,439	8,071
負債計	15,432,466	15,440,538	8,071
デリバティブ取引	-	-	-

当連結会計年度（2019年2月28日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	1,721,811	1,721,811	-
(2) 受取手形及び売掛金	1,714,570		
貸倒引当金	29,015		
	1,685,555	1,685,555	-
(3) 投資有価証券 その他有価証券	1,424,806	1,424,806	-
(4) 差入保証金	6,432,795		
貸倒引当金	4,338,000		
	2,094,795	1,903,118	191,676
資産計	6,926,968	6,735,291	191,676
(1) 支払手形及び買掛金	3,010,504	3,010,504	-
(2) 短期借入金	3,977,481	3,977,481	-
(3) 預り金	3,226,109	3,226,109	-
(4) 長期借入金	4,414,410	4,420,551	6,141
負債計	14,628,504	14,634,646	6,141
デリバティブ取引	-	-	-

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっている。

(3) 投資有価証券

株式の時価は取引所の価格によっている。

(4) 差入保証金

差入保証金の時価については、回収可能性を反映した将来キャッシュ・フローを残存期間に対応する国債の利回り等で割り引いた現在価値により算定している。

負債

(1) 支払手形及び買掛金、(2) 短期借入金ならびに(3) 預り金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっている。

(4) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっている。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」参照。

(注) 2 . 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
非上場株式	804,388	750,338

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3) 投資有価証券」には含めていない。

(注) 3 . 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年2月28日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	1,865,692	-	-	-
受取手形及び売掛金	1,618,601	-	-	-
差入保証金	104,678	498,480	743,100	5,191,788
合計	3,588,972	498,480	743,100	5,191,788

当連結会計年度(2019年2月28日)

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	1,721,811	-	-	-
受取手形及び売掛金	1,685,555	-	-	-
差入保証金	58	-	-	2,094,736
合計	3,407,425	-	-	2,094,736

(注) 4 . 長期借入金及びリース債務の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度 (2018年2月28日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	4,190,228	-	-	-	-	-
長期借入金	759,955	666,695	769,123	764,108	764,273	1,277,214
リース債務	46,563	19,272	16,465	9,140	786	-
合計	4,996,746	685,967	785,588	773,248	765,059	1,277,214

当連結会計年度 (2019年2月28日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	3,977,481	-	-	-	-	-
長期借入金	439,692	769,123	764,108	764,273	709,222	967,992
リース債務	22,031	19,225	11,899	3,545	2,759	229
合計	4,439,204	788,348	776,007	767,818	711,981	968,221

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2018年2月28日)

	種類	連結貸借対照表計上額(千円)	取得原価(千円)	差額(千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	1,895,142	967,319	927,822
	小計	1,895,142	967,319	927,822
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	880	888	8
	小計	880	888	8
合計		1,896,022	968,207	927,814

当連結会計年度(2019年2月28日)

	種類	連結貸借対照表計上額(千円)	取得原価(千円)	差額(千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	745,587	186,774	558,812
	小計	745,587	186,774	558,812
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	679,218	756,337	77,119
	小計	679,218	756,337	77,119
合計		1,424,806	943,112	481,693

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自2017年3月1日至2018年2月28日)

重要性が乏しいため記載を省略している。

当連結会計年度(自2018年3月1日至2019年2月28日)

種類	売却額(千円)	売却益の合計額(千円)	売却損の合計額(千円)
株式	118,542	30,388	-
合計	118,542	30,388	-

3. 減損処理を行った有価証券

該当事項なし

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 金利関連

前連結会計年度(2018年2月28日)

該当事項なし

当連結会計年度(2019年2月28日)

該当事項なし

(退職給付関係)

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、確定給付型の制度として、退職一時金制度を設けている。なお、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算している。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

退職給付債務の期首残高	1,518,922 千円
勤務費用	76,388 千円
利息費用	7,600 千円
数理計算上の差異の発生額	10,980 千円
退職給付の支払額	142,676 千円
退職給付債務の期末残高	1,449,254 千円

簡便法を適用した制度を含んでいる。

(2) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

非積立型制度の退職給付債務	1,449,254 千円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,449,254 千円

退職給付に係る負債	1,449,254 千円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,449,254 千円

(3) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

勤務費用	76,388 千円
利息費用	7,600 千円
数理計算上の差異の費用処理額	26,532 千円
過去勤務費用の費用処理額	9,085 千円
確定給付制度に係る退職給付費用	101,436 千円

簡便法を適用した制度を含んでいる。

(4) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりである。

数理計算上の差異	37,513 千円
過去勤務費用	9,085 千円
合計	28,428 千円

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

未認識数理計算上の差異	10,980 千円
未認識過去勤務費用	61,324 千円
合計	72,305 千円

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

当連結会計年度末における主要な数理計算上の計算基礎

割引率 0.6%

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、確定給付型の制度として、退職一時金制度を設けている。なお、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算している。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

退職給付債務の期首残高	1,449,254 千円
勤務費用	74,851 千円
利息費用	7,430 千円
数理計算上の差異の発生額	13,285 千円
退職給付の支払額	80,398 千円
退職給付債務の期末残高	1,437,852 千円

簡便法を適用した制度を含んでいる。

(2) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

非積立型制度の退職給付債務	1,437,852 千円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,437,852 千円
退職給付に係る負債	1,437,852 千円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,437,852 千円

(3) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

勤務費用	74,851 千円
利息費用	7,430 千円
数理計算上の差異の費用処理額	10,980 千円
過去勤務費用の費用処理額	9,085 千円
確定給付制度に係る退職給付費用	62,216 千円

簡便法を適用した制度を含んでいる。

(4) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

数理計算上の差異	2,304 千円
過去勤務費用	9,085 千円
合計	6,780 千円

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

未認識数理計算上の差異	13,285 千円
未認識過去勤務費用	52,239 千円
合計	65,524 千円

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

当連結会計年度末における主要な数理計算上の計算基礎
割引率 0.6%

(ストック・オプション等関係)

該当事項なし

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
繰延税金資産		
賞与引当金	30,771千円	16,836千円
退職給付に係る負債	448,982	445,831
貸倒引当金繰入限度超過額	380,372	1,699,403
減価償却費損金算入限度超過額	45,636	45,616
減損損失	99,216	158,248
繰越欠損金	1,164,406	1,152,504
商品券等回収損失引当金	173,921	166,112
役員退職慰労金	24,476	24,476
店舗閉鎖損失引当金	-	79,605
その他	261,958	289,836
繰延税金資産小計	2,629,742	4,078,472
評価性引当額	2,481,359	3,927,776
繰延税金資産合計	148,383	150,695
繰延税金負債		
資産除去債務	20,618	20,003
その他有価証券評価差額金	282,511	146,937
合併による土地評価差額	496,993	496,993
繰延税金負債合計	800,123	663,934
繰延税金負債の純額	651,739	513,239

(前連結会計年度)

なお、上記のほか、土地再評価差額金に係る繰延税金負債が353,427千円あります。

(当連結会計年度)

なお、上記のほか、土地再評価差額金に係る繰延税金負債が353,427千円あります。

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれている。

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
流動資産 - 繰延税金資産	98,493千円	103,383千円
固定資産 - 繰延税金資産	49,889	47,311
固定負債 - 繰延税金負債	800,123	663,934

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年2月28日)	当連結会計年度 (2019年2月28日)
法定実効税率	30.7%	30.7%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	4.3	0.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	2.9	0.1
評価性引当額の増減	41.5	30.9
住民税均等割額	5.4	0.2
持分法投資損益	1.3	0.0
その他	1.1	0.3
税効果会計適用後の法人税等の負担率	1.6	0.8

(企業結合等関係)

該当事項なし

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

当社企業グループは、賃貸用店舗および事業用資産の一部について土地または建物所有者との間で不動産賃貸借契約を締結しており、賃借期間終了時に原状回復する義務を有しているため、契約上の義務に関して資産除去債務を計上している。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から55年から60年と見積り、割引率は2.2%を使用して資産除去債務の金額を計算している。

八 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
期首残高	209,897千円	214,514千円
見積りの変更に伴う増加額(注)	-	180,000
時の経過による調整額	4,617	4,719
期末残高	214,514	399,234

(注) 当連結会計年度において、高岡店の店舗営業終了の意思決定に伴い、原状回復義務の費用総額の見積りが可能となったことにより、見積りの変更に伴う増加額180,000千円を変更前の資産除去債務残高に加算している。

なお、当該見積りの変更により、税金等調整前当期純損失は180,000千円増加している。

(賃貸等不動産関係)

当社及び一部の連結子会社では、石川県その他の地域において、賃貸用の商業施設等(土地を含む。)を有している。なお、賃貸用商業施設の一部については、当社及び一部の子会社を使用しているため、賃貸等不動産として使用される部分を含む不動産としている。前連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は125,417千円(賃貸収益は営業外収益に、主な賃貸費用は営業費用に計上)である。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は269,898千円(賃貸収益は営業外収益に、主な賃貸費用は営業費用に計上)である。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりである。

(単位：千円)

		前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
賃貸等不動産	連結貸借対照表計上額	期首残高	1,489,482
		期中増減額	265,715
		期末残高	1,223,767
	期末時価		989,308
賃貸等不動産として 使用される部分 を含む不動産	連結貸借対照表計上額	期首残高	7,629,299
		期中増減額	257,330
		期末残高	7,371,969
	期末時価		7,059,736

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額である。
2. 期中増減額のうち、前連結会計年度の主な減少額は減価償却費(265,185千円)、不動産売却(256,063千円)である。当連結会計年度の主な減少額は減価償却費(276,342千円)、不動産売却(90,800千円)である。
3. 期末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額(指標等を用いて調整を行ったものを含む。)である。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社企業グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっている。当社企業グループでは、「百貨店業」「ホテル業」及び「出版業」を報告セグメントとしている。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一である。

報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値である。セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいている。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

(単位:千円)

	報告セグメント				その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結財務 諸表計上額 (注) 3
	百貨店業	ホテル業	出版業	計				
売上高								
外部顧客への売上高	43,002,712	1,522,895	711,309	45,236,917	272,415	45,509,332	-	45,509,332
セグメント間の内部売上高又は振替高	6,602	74,013	-	80,616	714,911	795,528	(795,528)	-
計	43,009,315	1,596,909	711,309	45,317,534	987,326	46,304,860	(795,528)	45,509,332
セグメント利益	39,288	105,771	29,086	174,146	(19,380)	154,766	(26,998)	127,767
セグメント資産	28,176,428	3,495,850	1,116,792	32,789,071	451,371	33,240,442	759,001	33,999,443
その他の項目								
減価償却費	957,765	91,565	5,995	1,055,326	30,450	1,085,776	(9,267)	1,076,509
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	154,315	51,544	4,200	210,060	38,450	248,511	-	248,511

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、印刷業及び飲食業を含んでいる。

2. (1) セグメント利益の調整額 26,998千円は、貸倒引当金戻入等 23,789千円、持分法投資損失 5,442千円、未実現利益の消去等2,233千円である。

(2) セグメント資産の調整額759,001千円は、セグメント間の債権債務の消去等 1,941,409千円及び各報告セグメントに配分していない全社資産2,700,410千円である。

3. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っている。

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

(単位:千円)

	報告セグメント				その他 (注)1	合計	調整額 (注)2	連結財務 諸表計上額 (注)3
	百貨店業	ホテル業	出版業	計				
売上高								
外部顧客への売上高	43,139,079	1,475,461	772,149	45,386,690	240,931	45,627,622	-	45,627,622
セグメント間の内部売上高又は振替高	7,913	60,639	-	68,552	724,542	793,095	(793,095)	-
計	43,146,992	1,536,101	772,149	45,455,243	965,474	46,420,718	(793,095)	45,627,622
セグメント利益	240,531	33,555	35,806	309,892	(91)	309,801	(2,563)	307,238
セグメント資産	22,870,669	3,440,806	1,124,726	27,436,202	468,697	27,904,899	322,299	28,227,199
その他の項目								
減価償却費	804,402	90,177	6,926	901,505	27,229	928,734	(7,421)	921,312
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	461,330	30,951	1,200	493,482	1,261	494,744	-	494,744

(注)1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、印刷業及び飲食業を含んでいる。

2. (1) セグメント利益の調整額 2,563千円は、持分法投資利益1,499千円、未実現利益の消去等4,062千円である。
- (2) セグメント資産の調整額322,299千円は、セグメント間の債権債務の消去等 1,852,844千円及び各報告セグメントに配分していない全社資産2,175,144千円である。
3. セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っている。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

1．製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略した。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はない。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所有している有形固定資産がないため、該当事項はない。

3．主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はない。

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

1．製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略した。

2．地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はない。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所有している有形固定資産がないため、該当事項はない。

3．主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はない。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

該当事項なし

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

（単位：千円）

	百貨店業	ホテル業	出版業	その他	全社・消去	合計
減損損失	282,000	-	-	-	-	282,000

減損損失の詳細は、（連結損益計算書関係）に記載の通りである。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

該当事項なし

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限る。）等

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

いずれも該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

いずれも該当事項なし

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

いずれも該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

いずれも該当事項なし

(ウ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

いずれも該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

いずれも該当事項なし

(エ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

前連結会計年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

いずれも該当事項なし

当連結会計年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

いずれも該当事項なし

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

いずれも該当事項なし

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

いずれも該当事項なし

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

いずれも該当事項なし

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

いずれも該当事項なし

(ウ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

いずれも該当事項なし

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

いずれも該当事項なし

(エ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

いずれも該当事項なし

当連結会計年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

いずれも該当事項なし

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

該当事項なし

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

該当事項なし

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)		当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)	
1株当たり純資産額	1,490.05円	1株当たり純資産額	571.92円
1株当たり当期純利益	15.86円	1株当たり当期純損失	846.79円

- (注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載していない。
2. 当社は、2017年9月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っている。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益を算定している。
3. 1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前連結会計年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当連結会計年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失() (千円)	89,038	4,752,406
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失() (千円)	89,038	4,752,406
期中平均株式数(株)	5,613,595	5,612,256

- (注) 2017年9月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を行っている。前連結会計年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して期中平均株式数を算定している。

(重要な後発事象)

店舗営業の終了について

(1) 店舗営業終了に至った経緯

当社企業グループは、主力の百貨店業において「ライフスタイル・ソリューション型百貨店」の構築を目指し、マーケット対応力の向上を機軸として「お客様の暮らしに新たな価値を創造する」ことに注力し、収益力の強化に努めている。

このような中、高岡店においては、近年の売上低迷に対し、品揃えの見直しや経費の削減など徹底した効率化に取り組んできたが、市場環境の変化や一層の競合激化が進む中、今後、顧客のご要望に対応していくことが困難であり、収益改善が見込めないと判断した。

そのため、当社としては、収益構造の抜本的改善を図るため、高岡店の営業を終了し、増収基調に転じた香林坊店と富山店に経営資源の集中を図り、将来に亘る安定的収益基盤の確立に取り組むとともに、次なる成長戦略の礎を築いていくこととした。

(2) 営業を終了する店舗の概要

店舗名 高岡店
所在地 富山県高岡市御旅屋町101番地
沿革 1943年(昭和18年)12月 開設
1994年(平成6年)3月 現店舗に移転開設
売場面積 16,099㎡
売上高 3,891百万円(2019年2月期実績値)
従業員数 59名(正社員32名、契約社員27名)

(3) 閉鎖の時期

2019年8月25日(日)(予定)

(4) 業績に及ぼす影響

本件に伴う特別損失として、店舗閉鎖損失4,908,000千円を2019年2月期に計上している。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項なし

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	4,190,228	3,977,481	1.242	-
1年以内に返済予定の長期借入金	759,955	439,692	1.673	-
1年以内に返済予定のリース債務	46,563	22,031	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	4,241,413	3,974,718	1.414	2020年～2027年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	45,664	37,658	-	2020年～2024年
合計	9,283,824	8,451,581	-	-

(注) 1. 平均利率については、借入金の当期末残高に対する加重平均利率を使って算定している。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載していない。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年以内における返済予定額は以下のとおりである。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	769,123	764,108	764,273	709,222
リース債務	19,225	11,899	3,545	2,759

【資産除去債務明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)
不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務	214,514	184,719	-	399,234

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	11,030,185	21,890,976	32,612,213	45,627,622
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前当期純損失()(千円)	114,176	140,912	151,382	4,703,438
親会社株主に帰属する四半期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失()(千円)	83,870	102,960	91,329	4,752,406
1株当たり四半期純利益又は1株当たり当期純損失()(円)	14.94	18.35	16.27	846.79

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期純損失()(円)	14.94	3.40	2.07	863.06

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,566,777	1,364,415
受取手形	2 10,913	2 6,437
売掛金	2 1,230,172	2 1,299,433
商品	1,850,394	1,656,514
貯蔵品	16,059	17,131
前払費用	126,668	123,474
未収入金	37,578	73,308
その他	2 95,871	2 220,440
貸倒引当金	25,300	23,900
流動資産合計	4,909,137	4,737,255
固定資産		
有形固定資産		
建物	1 8,431,929	1 7,959,625
車両運搬具	12,625	9,278
工具、器具及び備品	327,083	280,753
土地	1 6,091,083	1 6,000,283
有形固定資産合計	14,862,721	14,249,940
無形固定資産		
ソフトウェア	25,969	31,465
無形固定資産合計	25,969	31,465
投資その他の資産		
投資有価証券	1 2,488,613	1 1,963,465
関係会社株式	455,500	455,500
関係会社長期貸付金	2 1,906,000	2 1,822,000
差入保証金	6,144,279	6,039,027
その他	118,989	119,628
貸倒引当金	808,459	5,140,745
投資その他の資産合計	10,304,922	5,258,876
固定資産合計	25,193,613	19,540,282
資産合計	30,102,750	24,277,538

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	117,080	119,539
買掛金	2 2,536,053	2 2,645,003
短期借入金	1 3,553,646	1 3,303,099
1年内返済予定の長期借入金	1 715,786	1 414,797
リース債務	34,829	7,538
未払金	137,217	139,591
未払消費税等	96,878	-
未払法人税等	75,464	27,295
未払事業所税	35,600	35,300
未払費用	2 220,356	2 223,794
前受金	20,224	24,459
商品券	1,263,998	1,157,538
預り金	2 7,574,851	2 7,595,448
賞与引当金	70,000	36,000
ポイント引当金	216,099	213,106
設備関係支払手形	3,067	80,509
商品券回収損失引当金	324,908	284,468
店舗閉鎖損失引当金	-	261,000
その他	23,278	31,487
流動負債合計	17,019,340	16,599,977
固定負債		
長期借入金	1 4,152,300	1 3,910,500
リース債務	14,441	6,902
繰延税金負債	799,663	663,489
退職給付引当金	1,338,398	1,311,640
資産除去債務	209,059	393,658
関係会社事業損失引当金	65,477	65,477
その他	81,300	81,300
固定負債合計	6,660,639	6,432,968
負債合計	23,679,979	23,032,946

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,462,700	3,462,700
資本剰余金		
資本準備金	1,151,981	1,151,981
資本剰余金合計	1,151,981	1,151,981
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	1,758,383	3,110,461
利益剰余金合計	1,758,383	3,110,461
自己株式	594,049	594,453
株主資本合計	5,779,015	909,766
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	643,754	334,825
評価・換算差額等合計	643,754	334,825
純資産合計	6,422,770	1,244,592
負債純資産合計	30,102,750	24,277,538

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当事業年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
売上高	2 43,016,613	2 43,146,992
売上原価	34,037,387	34,198,244
売上総利益	8,979,225	8,948,748
販売費及び一般管理費	1 8,818,540	1 8,547,124
営業利益	160,684	401,623
営業外収益		
受取利息	2 20,127	2 14,535
受取配当金	2 47,986	2 56,229
受取賃貸料	2 157,907	2 132,889
長期末回収商品券	153,383	151,778
固定資産受贈益	5,016	1,106
雑収入	2 42,932	2 36,940
営業外収益合計	427,352	393,479
営業外費用		
支払利息	2 205,602	2 243,939
減価償却費	124,365	118,288
商品券回収損失引当金繰入額	143,435	147,210
雑損失	2 42,058	2 51,330
営業外費用合計	515,461	560,768
経常利益	72,575	234,335
特別利益		
投資有価証券売却益	-	30,388
固定資産売却益	125,593	-
特別利益合計	125,593	30,388
特別損失		
店舗閉鎖損失	-	3, 4 4,981,000
固定資産除却損	32,538	58,068
固定資産売却損	-	917
貸倒引当金繰入額	66,248	-
関係会社事業損失引当金繰入額	65,477	-
特別損失合計	164,264	5,039,986
税引前当期純利益又は税引前当期純損失()	33,903	4,775,262
法人税、住民税及び事業税	40,948	9,993
法人税等調整額	58,370	600
法人税等合計	17,421	9,393
当期純利益又は当期純損失()	51,325	4,784,655

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年3月1日 至 2018年2月28日）

（単位：千円）

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	3,462,700	1,151,981	1,151,981	1,791,275	1,791,275	593,014	5,812,943
当期変動額							
剰余金の配当			-	84,217	84,217		84,217
当期純利益			-	51,325	51,325		51,325
自己株式の取得			-		-	1,035	1,035
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			-		-		-
当期変動額合計	-	-	-	32,892	32,892	1,035	33,927
当期末残高	3,462,700	1,151,981	1,151,981	1,758,383	1,758,383	594,049	5,779,015

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	514,768	514,768	6,327,711
当期変動額			
剰余金の配当		-	84,217
当期純利益		-	51,325
自己株式の取得		-	1,035
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	128,986	128,986	128,986
当期変動額合計	128,986	128,986	95,058
当期末残高	643,754	643,754	6,422,770

当事業年度（自 2018年3月1日 至 2019年2月28日）

（単位：千円）

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	3,462,700	1,151,981	1,151,981	1,758,383	1,758,383	594,049	5,779,015
当期変動額							
剰余金の配当			-	84,188	84,188		84,188
当期純損失（ ）			-	4,784,655	4,784,655		4,784,655
自己株式の取得			-			404	404
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			-				-
当期変動額合計	-	-	-	4,868,844	4,868,844	404	4,869,249
当期末残高	3,462,700	1,151,981	1,151,981	3,110,461	3,110,461	594,453	909,766

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	643,754	643,754	6,422,770
当期変動額			
剰余金の配当			84,188
当期純損失（ ）			4,784,655
自己株式の取得			404
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	308,929	308,929	308,929
当期変動額合計	308,929	308,929	5,178,178
当期末残高	334,825	334,825	1,244,592

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

商品 売価還元法による低価法(貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

貯蔵品 先入先出法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

3. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用している。

なお主な耐用年数は以下のとおりである。

建物 5～60年

車両及び運搬具 5年

器具及び備品 3～10年

無形固定資産(リース資産を除く)

定額法を採用している。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づいている。

リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し回収不能見込額を計上している。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額に基づき計上している。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上している。

なお、過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理している。

また、数理計算上の差異は、発生翌事業年度に一括して費用処理している。

(4) ポイント引当金

ポイントカード会員へ付与したポイント利用に備えるため、付与ポイント残高から失効ポイント見込額を控除した額を、将来の利用見込額として計上している。

(5) 商品券回収損失引当金

商品券が負債計上中止後に回収された場合に発生する損失に備えるため、過去の実績に基づく将来の回収見込額を計上している。

(6) 関係会社事業損失引当金

関係会社の事業に係る損失に備えるため、当該会社の財政状態等を勘案し、必要と認められる額を計上している。

(7) 店舗閉鎖損失引当金

店舗の閉鎖に伴い、今後発生が見込まれる損失について、合理的に見積もられる金額を計上している。

5. その他の財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 消費税等の会計処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式を採用している。

(会計方針の変更)

該当事項なし

(表示方法の変更)

該当事項なし

(会計上の見積りの変更)
該当事項なし

(追加情報)
該当事項なし

(貸借対照表関係)

1 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は次の通りである。

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
建物	8,313,371千円	7,850,812千円
土地	5,962,665	5,871,865
投資有価証券	1,208,057	923,986
計	15,484,095	14,646,664

担保付債務は次の通りである。

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
短期借入金	4,269,432千円	3,717,896千円
長期借入金	4,152,300	3,910,500
計	8,421,732	7,628,396

2 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示されたものを除く)

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
短期金銭債権	2,066千円	784千円
長期金銭債権	1,906,000	1,822,000
短期金銭債務	7,560,026	7,581,466

3 偶発債務

下記の関係会社の銀行借入に対して次の債務保証を行っている。

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
(株)金沢ニューグランドホテル	649,920千円	675,262千円

下記の連結子会社の前受金業務保証金供託に対して、次の連帯保証を行っている。

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
(株)大和カーネーションサークル	3,172,000千円	3,232,000千円

(損益計算書関係)

- 1 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度20%、当事業年度25%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度80%、当事業年度75%である。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりである。

	前事業年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当事業年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
広告宣伝費	682,881千円	683,892千円
販売手数料	500,775	510,078
貸倒引当金繰入額	200	1,400
給料及び手当	1,935,027	1,885,275
賞与引当金繰入額	70,000	24,000
退職給付費用	86,226	45,845
賃借料	1,193,507	1,188,618
減価償却費	830,377	683,091
ポイント引当金繰入額	616,610	593,130

2 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)	当事業年度 (自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)
営業取引による取引高		
売上高	6,836千円	7,608千円
仕入高	1,219,563	1,236,964
営業取引以外の取引による取引高	187,566	151,770

3 店舗閉鎖損失

当社が計上した店舗閉鎖損失の内訳は次のとおりである。

前事業年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

該当事項なし

当事業年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

保証金等に係る貸倒引当金繰入額 4,338,000 千円

固定資産に係る減損損失 282,000

その他閉鎖に係る費用(注) 361,000

計 4,981,000

(注) 店舗閉鎖損失引当金繰入額261,000千円は、その他閉鎖に係る費用に含めて表示している。

4 減損損失

当社は以下の資産グループについて減損損失を計上した。

前事業年度(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日)

該当事項なし

当事業年度(自 2018年3月1日 至 2019年2月28日)

場所	用途	種類
富山県高岡市	店舗等	建物その他

店舗等については継続して収支を把握している単位で、遊休資産については当該資産単独で資産のグルーピングをしている。当該資産グループは、営業終了の意思決定を行ったため、閉鎖時の帳簿価額282,000千円について、回収可能性が見込めないとして減損損失を計上した。

減損損失の内訳は、建物277,274千円、その他4,725千円であり、特別損失の店舗閉鎖損失に含めて表示している。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式255,500千円、関連会社株式200,000千円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式255,500千円、関連会社株式200,000千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
繰延税金資産		
賞与引当金	23,853千円	8,125千円
退職給付引当金	408,211	400,050
貸倒引当金繰入限度超過額	378,553	1,697,596
減損損失	92,701	151,734
繰越欠損金	998,125	1,009,973
商品券回収損失引当金	99,746	86,762
店舗閉鎖損失引当金	-	79,605
その他	274,273	290,061
繰延税金資産小計	2,275,466	3,723,908
評価性引当額	2,275,466	3,723,908
繰延税金資産合計	-	-
繰延税金負債		
資産除去債務	20,158	19,558
その他有価証券評価差額金	282,511	146,937
合併による土地評価差額	496,993	496,993
繰延税金負債合計	799,663	663,489
繰延税金負債の純額	799,663	663,489

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年2月28日)	当事業年度 (2019年2月28日)
法定実効税率	30.7%	30.7%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	12.9	0.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	10.5	0.1
住民税均等割額	15.2	0.2
評価性引当金の増減	104.0	30.6
その他	4.4	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	51.4	0.2

(企業結合等関係)

該当事項なし

(重要な後発事象)

店舗営業の終了について

(1) 店舗営業終了に至った経緯

当社は、「ライフスタイル・ソリューション型百貨店」の構築を目指し、マーケット対応力の向上を機軸として「お客様の暮らしに新たな価値を創造する」ことに注力し、収益力の強化に努めている。

このような中、高岡店においては、近年の売上低迷に対し、品揃えの見直しや経費の削減など徹底した効率化に取り組んできたが、市場環境の変化や一層の競合激化が進む中、今後、顧客のご要望に対応していくことが困難であり、収益改善が見込めないと判断した。

そのため、当社としては、収益構造の抜本的改善を図るため、高岡店の営業を終了し、増収基調に転じた香林坊店と富山店に経営資源の集中を図り、将来に亘る安定的収益基盤の確立に取り組むとともに、次なる成長戦略の礎を築いていくこととした。

(2) 営業を終了する店舗の概要

店舗名 高岡店
所在地 富山県高岡市御旅屋町101番地
沿革 1943年(昭和18年)12月 開設
1994年(平成6年)3月 現店舗に移転開設
売場面積 16,099㎡
売上高 3,891百万円(2019年2月期実績値)
従業員数 59名(正社員32名、契約社員27名)

(3) 閉鎖の時期

2019年8月25日(日)(予定)

(4) 業績に及ぼす影響

本件に伴う特別損失として、店舗閉鎖損失4,908,000千円を2019年2月期に計上している。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	8,431,929	616,741	75,290	1,013,755 (277,274)	7,959,625	12,954,945
	車両及び運搬具	12,625	1,210	0	4,557	9,278	33,332
	工具、器具及び備品	327,083	4,754	722	50,362 (4,725)	280,753	524,572
	土地	6,091,083	-	90,800	-	6,000,283	-
	建設仮勘定	-	447,412	447,412	-	-	-
	計	14,862,721	1,070,118	614,224	1,068,674	14,249,940	13,512,851
無形固定資産	ソフトウェア	25,969	18,624	-	13,127	31,465	-
	計	25,969	18,624	-	13,127	31,465	-

(注) 1. 「当期償却額」欄の()は内数で、当期の減損損失計上額である。

2. 「減価償却累計額」には減損損失累計額を含めて記載している。

3. 建物の「当期増加額」のうち、主なものは香林坊店売場改装による増加361,732千円であり、「当期減少額」のうち、主なものは売場改装による減少57,453千円である。

4. 土地の「当期減少額」は、白山市の土地売却による減少90,800千円である。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	833,759	4,339,000	8,114	5,164,645
賞与引当金	70,000	24,000	58,000	36,000
ポイント引当金	216,099	593,130	596,123	213,106
商品券回収損失引当金	324,908	147,210	187,650	284,468
店舗閉鎖損失引当金	-	261,000	-	261,000
関係会社事業損失引当金	65,477	-	-	65,477
退職給付引当金	1,338,398	45,845	72,603	1,311,640

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項なし

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	3月1日から2月末日まで
定時株主総会	5月中
基準日	2月末日
剰余金の配当の基準日	2月末日 8月末日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
買取手数料	-
公告掲載方法	2006年5月25日開催の定時株主総会の決議により定款が変更され、会社の公告の方法は次のとおりとなる。 「当会社の公告方法は、電子公告とする。但し、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。」 公告掲載URL (http://www.daiwa-dp.co.jp/)
株主に対する特典	2月末日現在100株以上の株主に対し、現金のお買物に限り、年間ご利用限度額の範囲内で10%を割引する「大和株主様優待カード」を送付いたします。 年間ご利用額については、100株から500株未満の保有の株主に30万円付与し、以後保有株式数に応じ、年間ご利用限度額が加算され、3,000株以上220万円を限度といたします。 その他の特典として、本人および同伴者1名様に限り、大和各店で開催される有料文化催事入場を無料といたします。 なお、カードの有効期限は1年間といたします。

(注) 1 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利以外の権利を有しておりません。

2 2017年5月25日開催の第101期定時株主総会において、同年9月1日をもって、当社の単元株式数を1,000株から100株に変更することを決議している。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はない。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出している。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度(第102期)(自 2017年3月1日 至 2018年2月28日) 2018年5月30日北陸財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年5月30日北陸財務局長に提出

(4) 四半期報告書及び確認書

(第103期第1四半期)(自 2018年3月1日 至 2018年5月31日) 2018年7月12日北陸財務局長に提出

(第103期第2四半期)(自 2018年6月1日 至 2018年8月31日) 2018年10月12日北陸財務局長に提出

(第103期第3四半期)(自 2018年9月1日 至 2018年11月30日) 2019年1月11日北陸財務局長に提出

(5) 臨時報告書

2018年5月30日北陸財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書である。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年5月30日

株式会社大和

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	石原鉄也印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	沖聡印

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社大和の2018年3月1日から2019年2月28日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社大和及び連結子会社の2019年2月28日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社大和の2019年2月28日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社大和が2019年2月28日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が連結財務諸表に添付する形で別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年5月30日

株式会社大和

取締役会 御中

太陽有限責任監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 石原鉄也 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 沖 聡 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社大和の2018年3月1日から2019年2月28日までの第103期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社大和の2019年2月28日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が財務諸表に添付する形で別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。